筑波大学附属図書館所蔵

日本美術の名品

Selected Works of Japanese Art from the Collection of University Library

——石山寺一切経・狩野探幽・尚信の新出屏風絵と歴聖大儒像——

筑波大学附属図書館所蔵

日本美術の名品

Selected Works of Japanese Art from the Collection of University Library

——石山寺一切経、狩野探幽・尚信の新出屏風絵と歴聖大儒像——

凡例

一、この図録は平成十二年五月二十二日(月)より六月九日(金)までを会期とし筑波大学芸術学系と筑波大学附属図書館が主催する特別展「筑波大学附属図書館所蔵　日本美術の名品―石山寺一切経、狩野探幽・尚信の新出屏風絵と歴聖大儒像―」の出品作品を収録したものである。

一、図版は書、絵画の順とし、図版番号は書では制作年代、絵画では作家の生年を順とし、展示もこれを考慮した構成をとった。図版番号は展示作品の題箋番号と一致する。

一、目録のうち法量は筑波大学附属図書館で計測したデータに従った。また新出の屏風絵（図版番号五～七）は今回の調査に参加した美術史研究室計測のデータを記載し、単位はすべてセンチメートルで表記した。

一、本展の展示作品はすべて筑波大学附属図書館の所蔵品であり、本図録は筑波大学附属図書館が発行するものである。

ご挨拶

筑波大学は、今年開学二十七周年を迎える若い大学ですが、前身校をさかのぼると、明治五年の師範学校にまで至り、実に百二十六年の長い歴史を有することになります。本学は、従来にはない全く新しい構想の大学として創設され、数々の先導的な試みを断行してきました。附属図書館もその一つであり、徹底したコンピュータ化と図書館資料の集中管理体制や全面開架方式により、利用しやすい図書館になっています。その一方、長い歴史の中で収集された資料は尨大なものであり、今回の展示品に見られるように、前身校からの優れた研究資料も数多く蓄積されています。

このたび初公開となる狩野探幽らの屏風絵は、本学に収蔵された経緯はまだ詳らかになっていませんが、少なくとも東京文理科大学時代の昭和十八年以前には保管されていたことが確認されています。狩野山雪の「歴聖大儒像」は、明治末に東京高等師範学校の嘉納治五郎校長が釈奠の祭祀を催した際に使用しています。また、石山寺本の「大智度論」と「瑜伽師地論」は、今回は「書」の名品として撰ばれたものですが、これらは東京教育大学文学部国語学研究室が戦後、古書肆反町弘文荘からもとめたもので、訓点資料としては最古のものに属し国語史研究上第一級の資料です。

今回は、芸術学系と附属図書館により本学に伝わる美術の名品を中心に特別展が企画されました。この機会に、新しい大学に古くからの伝統が生かされているさまをゆっくりご覧ください。

平成十二年五月

筑波大学長　北原保雄

ご挨拶

このたび筑波大学芸術学系と筑波大学附属図書館の主催で特別展「筑波大学附属図書館所蔵　日本美術の名品―石山寺一切経、狩野探幽・尚信の新出屏風絵と歴聖大儒像―」を開催いたします。

今回の企画は、筑波大学を会場として開催される第五十三回美術史学会全国大会（筑波大学後援）に合わせて計画されたものですが、本展の準備中に、狩野探幽、尚信及び田村直翁の屏風絵の発見という美術史上も意義深い出来事がありました。期せずして発見の契機を提供することになりましたことは、主催者として望外の喜びとするところであります。

本展は前身校から長く受け継がれてきた貴重な収蔵資料のうち、日本美術の名品という視点から展示品を選定いたしました。筑波大学の誇りとする書、絵画の逸品をご高覧いただきますとともに、資料の収集・保存・提供を受け持つ図書館とその収蔵資料を用いて教育研究にあたる学系との緊密な連携によって催されます展覧会を味わっていただけますならば幸甚に存じます。

最後になりましたが、今回の特別展開催にあたり、ご支援、ご協力を賜りました学内外の関係者に篤く御礼申し上げます。

平成十二年五月

主催者　筑波大学芸術学系長　白木俊之
筑波大学附属図書館長　板橋秀一

石山寺一切経のことなど

角井　博

開学十周年を記念して印行された五枚セットの絵ハガキ中に、天平六年書写の「大智度論」を発見して瞠目したのは、つい数年前のことである。その下方に横倒しに捺された「石山寺一切経」の黒印を見ることができる。このたび、既刊の「筑波大学和漢貴重図書目録」中から芸術に関係あるものとして図書館側より示されたリストにも石山寺関連のものがあり、幸い古典資料係の高配で調査の機を得たところ、「瑜伽師地論」の冒頭にも直立の同じ黒印を確認することができた。この両巻は正に、昭和二十八年に重要文化財に指定された石山寺一切経の一部であるので、大いに推奨しておきたいと思う。

石山寺（山号は石光山）は、琵琶湖に流れを注ぐ瀬田川の西方に位置する真言宗の寺院である。東大寺造営の際、近江からの用材を集荷した石山院という役所を基に、天平宝字六年（七六二）ごろ良弁（六八七―七七三）が寺院に改めたものといい、当初は華厳宗であったが、平安初期に真言密教の霊場となった。山紫水明の地に開かれた山岳寺院形式の伽藍で、境内には石山寺の名にふさわしく奇岩・怪石が多く、「石山秋月」は古来、近江八景の随一と喧伝されている。従って世に「石山詣」の語があるように、平安貴族や庶民の参籠・遊楽は盛んで、参籠者の中には和泉式部・赤染衛門ら女人も多く、紫式部が『源氏物語』を執筆した寺としてもゆかりの深いところである。むろん、歴代にわたり幾多の高僧・優秀な学僧を輩出しているが、彼らが書写・収集した多くの経典・聖教の類を襲蔵していることも特筆すべきで、その豊富な質量を誇るものが石山寺一切経なのである。

一切経（大蔵経）とは経・律・論の三蔵に注釈書などを加えたすべての仏典のことで、漢訳本は唐時代中期に総数五〇四八巻という膨大なものであった。わが国における写経は天武天皇二年（六七三）三月、飛鳥の川原寺で一切経を書写（日本書紀）したことに始まるが、奈良時代になると一切経の書写は国家鎮護の願いもあって国家的事業として盛行し、ことに天平期に入ると写経所が設置されて、経師・校正・装潢らが制作を分担するほどになった。当時を代表する遺品として、和銅三年（七一〇）の「知法発願一切経」、天平六年（七三四）の「聖武天皇勅願一切経」、天平十二年（七四〇）の「藤原夫人発願一切経」などを挙げることができる。また、個人の発願にかかる地方経も盛んで、各国府を中心に大量の経典が書写された。つづく平安時代の一切経には中尊寺経・荒川経・神護寺経、さらには藤原定信の手になる一筆一切経があるが、鎌倉時代以後は徐々

に減少し、やがて版経の制作へと移行していった。

石山寺一切経は如上のものとは性格を異にし、各時代・各所の写経を集めた、言わば混合の一切経である。現在、石山寺には四六四四帖が収蔵されており、一括して重要文化財に指定されていることは先述の通りである。その書写年代は奈良～室町時代に及び、その中には「光明皇后発願一切経」（五月一日経）、「吉備由利発願一切経」など、奈良～平安朝の優れた写経が多く、鎌倉～室町期の版経三九八帖も含んでいる。最も多いのは院政期の写経で、僧念西が発願勧進を行った写経事業（十二世紀中葉）によるものが約三分の二を占めるという。彼はまた一切経整備のために努力した学僧で、播磨国既多寺の「大智度論」、白点のある「瑜伽師地論」なども念西収集の一部と言われている。とまれ石山寺一切経は、奈良～室町時代にわたる書風の変遷を通覧することのできる写経資料として高い価値を有するものと言うことができる。これら一切経は本来は巻子装で、八十合の経箱に収納されて伝来したのであるが、江戸時代の天明年間（一七八一―八八）にいたり、尊賢の手によって朱刷り雲龍文の表紙に挟んだ折本形式に改装され、現状に帰している。この一切経の管理は歴代にわたり厳重だったはずであるが、いつしか譲渡・流失したものが諸所に分蔵されている。本学図書館収蔵品は、下記二巻である。

(1) 大智度論巻第七十　一巻　（八三二〇―一一六）

奈良時代　天平六年（七三四）

紙本墨書　縦二三・九糎　全長一〇四八・〇糎　（一紙の標準寸法　五七・三糎）

大智度論とは摩訶般若波羅密経の注釈書のことで、略して智度論・智論・大論・摩訶般若釈論ともいう。鳩摩羅什（四世紀）訳の一〇〇巻本が通行しており、般若の空思想を問答体によって平易に解説した経論として、大乗仏教を理解するには不可欠の経典とされている。巻首の経題に「般若波羅密品四十七之餘　巻七十」とあり、第七紙二行目より「四十八」が記されている。尾題は「大智度論巻第七十」で、そのあと二行の奥書「天平六年歳次甲戌十一月廿三日写針間国賀茂郡既多寺　物部連　大山」がある。現存する奈良時代の大智度論には地方の書写に属するものをよく見かけるが、この一巻も奈良朝によく行われた地方の知識経の好例である。知識とは、仏教事業に金品を寄進して援助する人や協力者のことで、それら浄財をもって書写した経典が知識経である。物部連大山は、針間（播磨）の国の既多寺（気多寺・廃寺）に帰依する熱心な仏教信者であり、写経事業への寄進者だったのであろう。巻中の随所に白訓点が付されているが、これは巻五十の識語により、天安二年（八五八）、山階寺（興福寺）の大詮大徳の講義を基に加点されたものであると考えられている。

なお本巻は、江戸時代に裏打ちが施され、木製の撥軸を芯とし、巻子本に改装されたものである。第一紙右

下辺に別筆で「紙廿二」の墨書があるが、実は十九紙で、いささか色調を異にする淡黄色の楮紙を継ぎ、淡墨の罫を引き、一行の字数は概ね十七字、稀に十八字に書写されている。第一紙下部に横転状の「石山寺一切経」の墨印があるのは先述の通りで、経文の書風はやや柔らか味のある筆線ながら、大きやかで重量感のある天平写経の趣を漂わせている。（昭和二十七年購入・館報つくばね二一―三）

(2) 瑜伽師地論巻第七十三　一帖　（八三二〇―一六三）

奈良時代　天平十六年（七四四）

紙本墨書　縦二三・九糎　横八・二糎

全十四紙　全長七九一・三糎　（一紙の標準寸法　五六・六糎）

瑜伽とはヨーガ（心の統一をはかる修行法）のことで、瞑想によって寂静の神秘境に入り、絶対者との合一を実現することを目的としている。瑜伽師地論とは、こうした観行を修する人の所依・所行・所摂の境界十七地を明らかにしたもので、ガンダーラ国のアサンガが兜率天に住む弥勒の説を聞いて記録したものと言われている。漢訳は数種あるが、唐の玄奘訳（六四八）の一〇〇巻本が著名で、奈良仏教、とりわけ法相宗の重要経典として唯識論とともに重視され、現存する遺品もかなりの量を数えている。本件は帖首に「瑜伽師地論巻第七十三　弥勒菩薩説　三蔵法師玄奘奉詔訳」の経題があり、その右下に「石山寺一切（経）」の墨印が捺されている。帖末の奥書は「天平十六年歳次甲申三月十五日讃岐国山田郡舎人国足」で、これまた地方経にして舎人国足の知識経であることを伝えている。淡黄色の楮紙に淡墨の界線を施し、一行十七字に整然と書写されており、文字はやや小ぶりで細身の線ながら、謹直で構築力の強い書風を誇示している。経文の随所に朱・白の訓点が付されていて、上代の国語学資料として貴重であることは(1)と同様である。

この経典は裏打ちを加えず、九十七扇に山・谷に折り重ねた折帖形式を成している。表紙に見られる朱刷りの雲龍文も装丁も、石山寺に現存する折本と同じなので、江戸時代天明期の尊賢の所行であることは間違いない。巻子装で伝わる大智度論は早期に散佚したものか、この瑜伽師地論は戦後のある時期に譲渡されたもののようである。

さて、本学図書館にはこのほか、真言・天台両宗の重要経典とされる古写経三巻が収蔵されている。①金剛頂経瑜伽修習毘盧遮那三摩地法は平安前期の書写で石山寺旧蔵、②金剛頂大教王経、③止観輔行伝弘決は平安後期の写経である。また、鎌倉～江戸時代にわたる国語・国文学上の貴重な写本類が随分とある。追って眼福を得たいと思っている。

（かくいひろし　芸術学系教授・芸術専門学群長）

図一　大智度論　巻第七〇　一巻

（奥書）

摩訶般若波羅蜜品卅七之餘　卷七

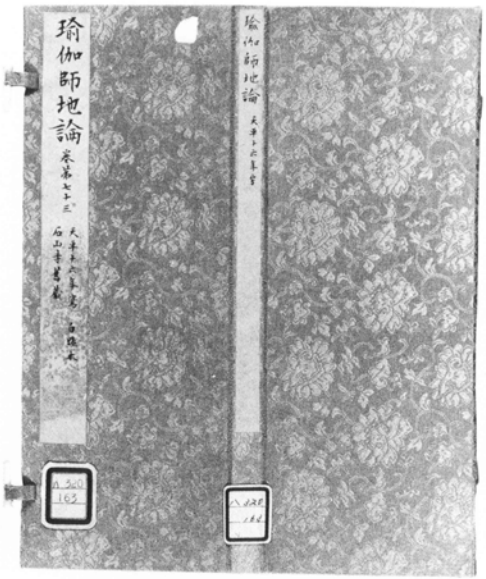
經復次須菩提佛曰深般若波羅蜜諸衆生心數出沒屈电如實知世尊云何佛曰般若波羅蜜衆生心數出沒屈电如實知佛言一切衆生心數出沒屈电等皆依色想受行識生須菩提佛於是中知[illegible]數出沒屈电所謂神及世間常是事實餘妄語是見衣色神及世間无常是事實餘妄語是見依色神及世間之常亦无常是事實餘妄語是見依色神

紙廿二

陳屋相不能盡漏諸法信慧諸相等一心
求道故漏盡者多比丘尼智慧少故廿人得
漏盡雖多得初道要過白衣不盡漏故不異
白衣此中不說入无生法忍甚深難得故少
又以於此法種曰緣者少賢劫中當受記者
或有人言賢劫中一一佛除四佛當與受記者
或有人言釋迦文佛與受記於賢劫中在餘
國土作佛 釋世品竟

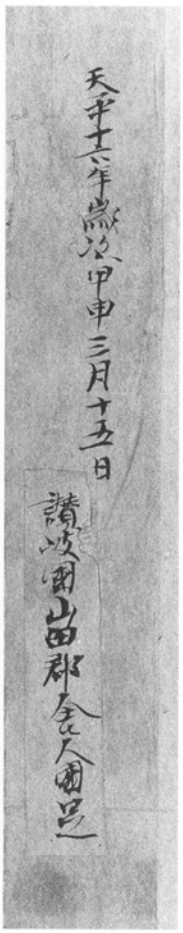
大智度經論卷第十

図二　瑜伽師地論　巻七三　一帖



前若不安心於无相男不隨所欲便為諸相
漂轉其心由此道理當知於相名言是縛云
何由教如世尊說
愚昧愚凡夫　於相為言縛　牟尼脫言縛　於相得自在
清淨見行者　安住於真智　於自性无得　不見彼所依
由真智清淨　說彼為真朋　二執不想應　故号為无二
又如異生於諸蘊中善知无我雖觀蘊中所
遣立我但是假有非不於彼我執隨轉由彼
隨眠未永斷故此中道理當知亦尒

瑜伽師地論卷第七十三



（奥書）

瑜伽師地論卷第七十三　弥勒菩薩說　三藏法師玄奘奉　詔譯

攝決擇分中菩薩地之二

復次嗢拖南曰

思擇自性取　薩迦有世間　真尋思實智　審意與次第

問如是五事幾諦所攝答相四安立諦攝名

一苦諦攝分別三諦攝除滅諦真如四非安

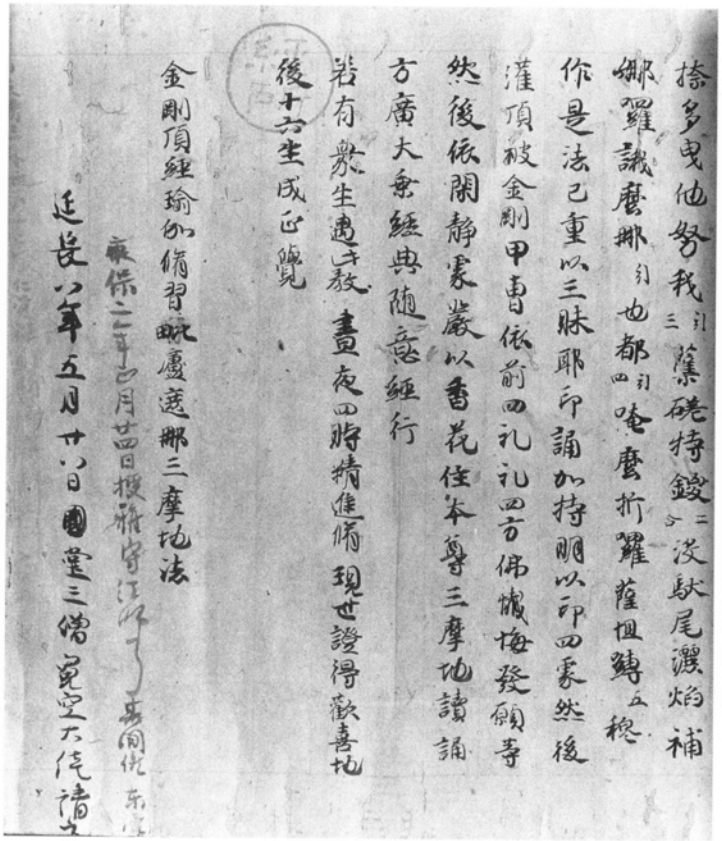
立諦攝正智緣安立非安立諦境道諦攝

問諸相是名耶設名是相耶答諸名皆是相

有相而非名謂除名相餘四相餘隨所應當

石山寺一切
315620
八320
163
767012299

図三　金剛頂経瑜伽修習毘盧遮那三摩地法　一巻



金剛頂經瑜伽修習毗盧遮那三摩地法

南天竺國三藏金剛智奉　　詔譯

歸命毗盧遮那佛　身口意業遍虛空
演說如來三密門　金剛一乘甚深教
我依瑜伽最勝法　開示真實修行家
為令衆生顯真實　頓證无上正等覺
弟子堅固菩提心　從師已受灌頂位
如修定慧恒觀察　深入業用善巧門
導諸有情勝菩提　以四攝法而攝取
[illegible]秋大悲[illegible]菩捨　[illegible]行小善更增美

歴聖大儒像と探幽・尚信の新出屏風について

守屋正彦

一、歴聖大儒像と狩野派、そして湯島聖堂について

狩野山雪筆「歴聖大儒像」は全二十一幅、筑波大学に六幅、東京国立博物館に十五幅伝えられている。このうち筑波大学本だけが湯島聖堂で行われる孔子祭典、釈奠（せきてん）の折に掛けられたことが『昌平志』に記されている。林羅山が幕府から賜った上野（忍岡）の自邸内に聖堂を設けた折、孔子像（木彫）の従祀として制作を依頼したもので、当初は『羅山文集』巻六十四に見られるように「聖賢像軸」と呼ばれており、「歴世大儒像」の呼称は彼の子林鵞峰が「狩野永納家伝画軸序」の中で述べているのが初見である。

肖像を描く場合、像主を対看写照することが原則のように思われてしまうが、歴聖大儒像の制作は例えば歌仙絵のように古典を写すことで肖像を伝えてきた事例と同様、中国からの版本を典拠に山雪が描いたことが杉原たく哉氏（「狩野山雪筆歴聖大儒像」早稲田大学美術史研究　一九九三）によって指摘されている。山雪は奇抜な個性と評価されるが、本図の制作にあたっては極めて念入りに学究的な制作態度を示し、堀杏庵や林羅山に図様を相談し、版本をはるかに超えた像主相貌の克明な細密描写が窺われるところである。その表現には擬似的かつ写実的な作為によって実在を確たるものとする精緻なリアリズムが配慮され、この新しき聖像表現は狩野探幽や常信に影響し、以後江戸に出た狩野本家の人々によって描かれることになった。たとえば探幽筆の儒者を描いた画像には伊達家（仙台）旧蔵の「聖賢図」（五幅対）やボストン美術館所蔵の「孔子・二弟子図」（三幅対）が見られる。

さらに『昌平志』には聖堂内を飾る先賢先儒九十九人の扁額十六枚があったことが記されている。賢儒像扁と呼称された本図は一六八八（元禄元）年に内部荘厳のために狩野益信（探幽養子）により制作された。しかしこれが罹災焼失し、一七〇四（宝永元）年に狩野常信（尚信長男）による扁額が再掲されたことが伝えられる。筑波大学には両者のいずれかを模した下絵（松谷天海粉本）が伝来、惜しいかな二枚失われたが扁額十四枚があまり痛みのない状態で往時を伝えている。ただ紙背には泥の付着した痕跡が数枚から窺え、災害から救い出したように汚れたまま保管されている。

ここで上記の所蔵歴を確認すると「歴聖大儒像」は明治初期の「浅草文庫」印が外題に捺されるも、その

後の所蔵印はなく、本学に移転するやや前に捺された「東京教育大学附属図書館」の印まで明らかではない。しかしながら本図蓋裏に貼られた一九一四（大正三）年の中村久四郎の解説から、すでにこの時期には東京高等師範学校と帝室博物館に所属していたことが明らかである。しかしこの頃には依然孔子祭典が行われ、本図を聖像として扱ったためか所蔵印のないまま伝来したことが窺われる。賢儒像扁に関しては「東京高等師範学校」印が紙背に捺され、これは早くに資料として本学に収蔵されたものであった。「歴聖大儒像」は昭和四十年代に持ち込まれたものであることが高木三男氏（「歴聖大儒像（聖賢像軸）」筑波大学附属図書館報つくばね一九八三）によって指摘されており、また同氏は三宅米吉が著した『聖堂略志』を引き、「釈奠に配祠されていた閔子をはじめ十哲の木主が東京高師に蔵されているとあるが、これも画像とともに移されたものか。木主は所在がわからないが学内の思わぬところに鎮座しているかもしれない。」と記している。もしこれが伝来しているならば関東大震災のおり湯島聖堂に祀られ焼失した孔子像以下五体の中央配祀の木彫像以外は江戸時代の聖堂を知る貴重資料はすべて本学の前身校に収蔵されていたことになる。

二、狩野探幽、尚信の新出屏風について

新出屏風はどのような経緯で本学の図書館に収蔵されたものか明らかでないが、図書館の備忘のメモにはすでに一九四三（昭和一八）年以前には所有していたようである。しかし寄贈ではないため受贈記録もなく、学内から持ち込まれ、現在まで保管が行われてきたと考えるほかはない。また、このたびの新出屏風は探幽、尚信のほかに田村直翁の屏風も確認されたが、それらはいずれも屏風を納める木箱が失われており、これらが何かの折に緊急避難したものか、箱書きも含めすべての記録が失われている。また探幽、尚信の両屏風をくるむ縁木（ふちき）に施された飾金具は同一のもので、これら両者は同じ所蔵にかかるものであることが明らかである。探幽、尚信の新出屏風は両屏風とも水墨の余白を大きく捉えた探幽様式と見なすことができ、今日言うところの斎書き時代にあたる作例である。またこの頃には画風が草体の表現に進み、『羅山文集』からは羅山、探幽両者の交流が窺われるところである。探幽画のうち肖像画のみに限って羅山の著賛を傍証として拾うと「蘇東婆像」（一六三八）、「佐久間将監像」（一六四一、江月宗玩と羅山による）、「朴安期寿像」（一六四三、朝鮮通信使）、「文宣王（孔子）像」（一六五五）が見られる。また羅山の子林鵞峰の著賛には「孔子像」（一六五八）など、また探幽は「羅山肖像」（一六六一頃）を描いたことが『国史館日録』に記載されている。これらのことから両屏風が聖堂資料である可能性も考慮して

よいと思われるが、今後の調査に期待したいところである。

狩野探幽筆の新出屏風については画題をどうすべきか典拠となるべき直接の作例が見当たらないため、便宜的に「野外奏楽、猿曳図」とした。ひとつに探幽が彼我の古典を充分に手控えし、引用と再合成による新しい構成をその画に示したからであろうが、一方それは従来の画題の換骨奪胎をも意味している。背景にあたる琴棋書画の画題からするならば隠者の奏楽だけをクローズアップし、閑静な野外での老人による合奏はわれわれが意識下に叩き込まれた常識的な括りから主題を開放したように感じてしまう。本図に先行する事例では狩野尚信の知恩院本「猿曳図」が見られ、太鼓を叩く人物、また猿曳、観衆の一部が同様の粉本からと思われ、あるいはこの知恩院本を整理しなおし、簡潔で明快な幾何学的構成をとる一双の屏風へと主題が整理されていったと解釈できる。屏風絵の構成についてはすでに主知的であり、幾何学的であることが指摘されているが、これについて斎書き時代の水墨画の屏風では静岡県立美術館本の「七賢九老図」（同館図録、山下善也稿により、本作が静岡県立美術館本を降る作例であることが明らかとなった。）が本図と最も近い関係にある作例であろう。一双屏風としての中心に大きく余白を取り、両端に行くほどボリュームを増し、鏡像的な対置が見られるところである。このことはやはり新出の尚信屏風にも見られるところである。筑波大学本の探幽屏風は、その表現には粗放な観が見られ、松樹の幹や手前の岩などは克明さを欠くが、草体の成果と見るべきか、本図をもってさらなる解釈が可能であろう。また今回新出の屏風によって、狩野安信の「竹林七賢、李白観瀑図」屏風（京都　三時知恩寺）は両者の描いた画題を組み合わせ再合成したものとその図式をとらえることも可能であろう。

以上本展の絵画出品に関し、その概要を来歴に触れながら簡単に述べた。期せずして新出の屏風絵が現れ、山雪から、探幽、尚信へと狩野派江戸進出期の貴重資料の展観となった。ちょうどこの頃は徳川氏が山稜を整備し、上野に寛永寺や東照宮、それに羅山の文庫が建ちはじめ、その環境の荘厳に探幽や尚信が活躍した時代である。本展は江戸初期の新しい文化を作る充実した気分が支配した時代と捉えることができ、狩野派の聖堂にかかわる資料もあわせて展観したが、これまで美術史や文化史において等閑視されてきたこの部分に学際的にも新しい解釈が行われることを願うものである。カタログでは画題や制作年に関し充分に検討できなかったが、今後に多くの識者のご高見を願いあげたい。終わりにこのたびの新出屏風に関し、東京大学の河野元昭教授に真贋の判断を仰ぎ、作品解釈の上でのご教導を賜った。記して謝意を申し上げる次第である。

（もりやまさひこ・芸術学系助教授）

図四　歴聖大儒像　六幅

四―(一)　周子(周濂渓)

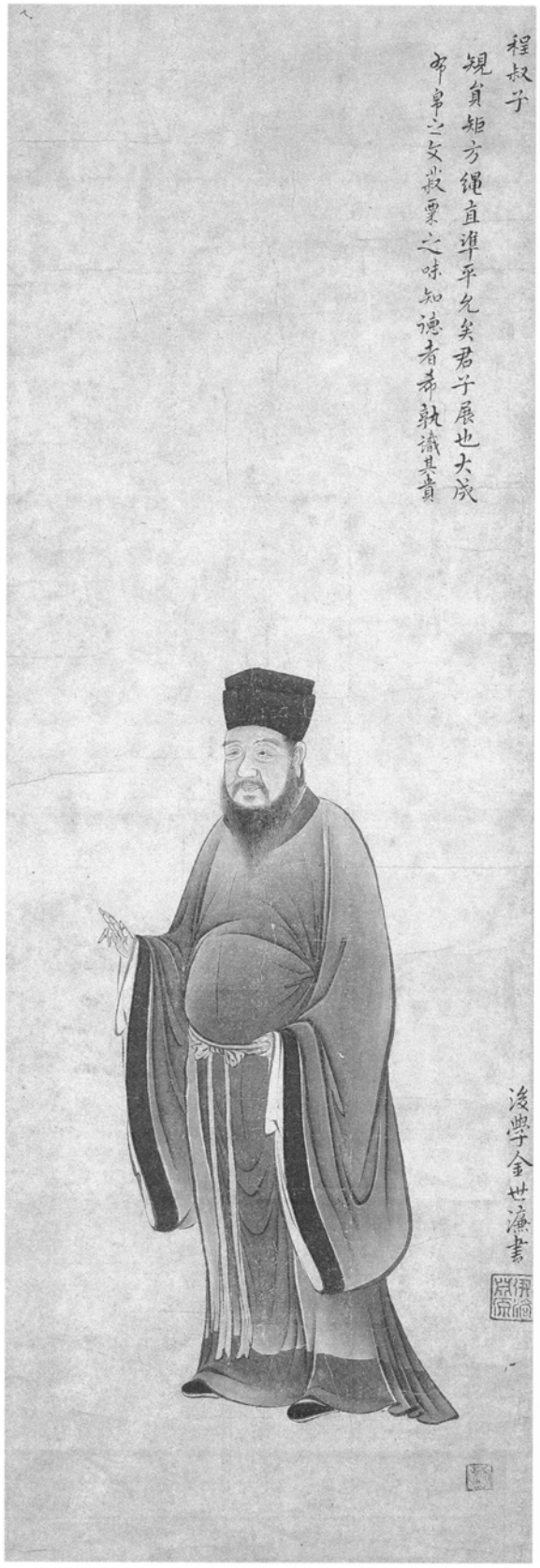
道喪千載聖遠言湮不有先覺孰開我人
書不盡言言不盡意風月無邊庭草交翠

四―(二)　張子(張横渠)

早悅孫吳晚逃佛老勇撤皐比一變至道
精思力踐妙契疾書訂頑之訓示我廣居

四—(三) 程伯子(程明道)

楊休山立玉色金聲元氣之會渾然天成
瑞日祥雲和風甘雨龍德正中厥施斯普



四—(四) 程叔子(程伊川)

規負矩方繩直準平允矣君子展也大成
布帛之文菽粟之味知德者希孰識其貴

四—(五) 邵子(邵康切)

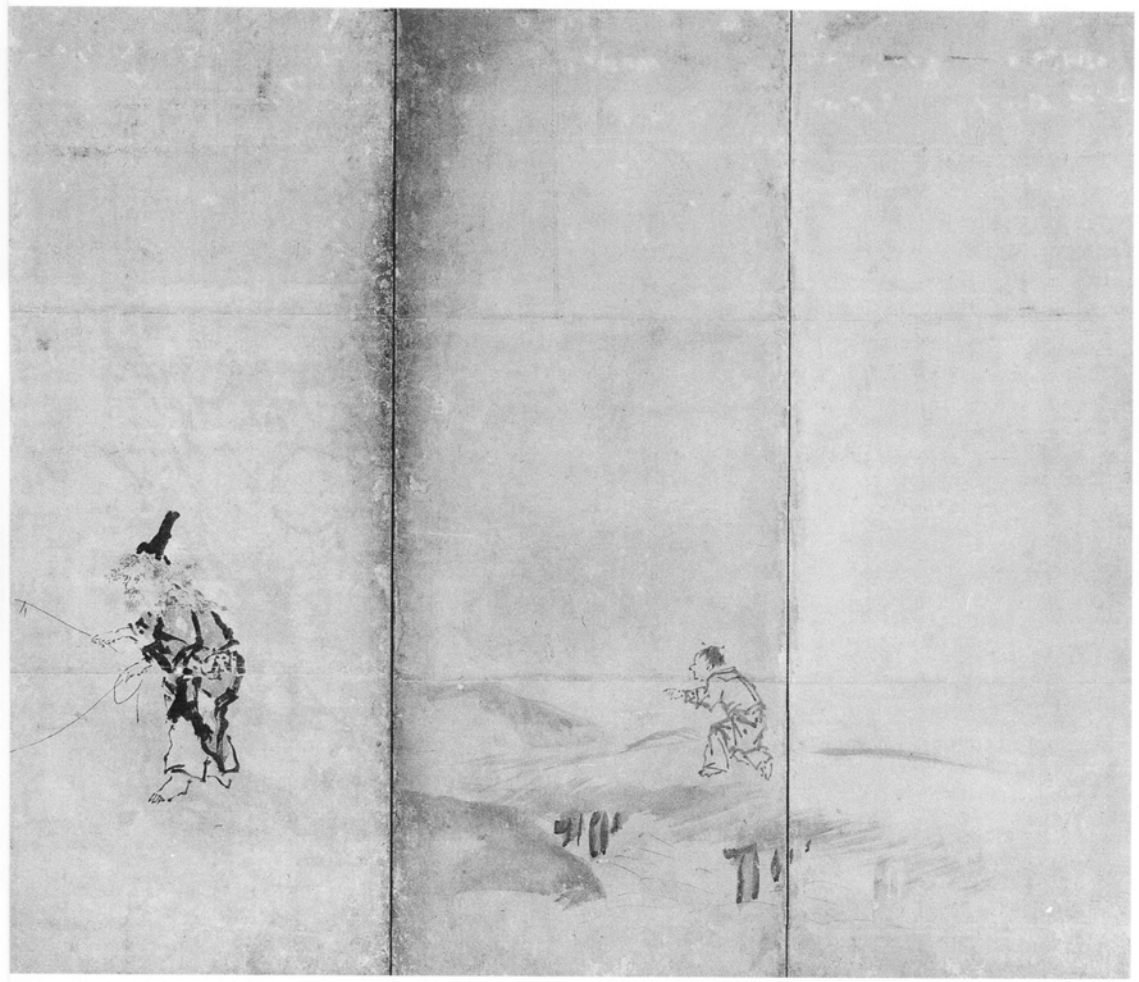
天挺人豪英邁蓋世駕風鞭霆歷覽無際
手探月窟足躡天根閑中今古醉裡乾坤

四—(六) 朱子(朱熹)

義理精微蠶絲牛毛心腦恢廓海濶天高
豪杰之才聖賢之學景星慶雲泰山喬岳

図五　「野外奏楽、猿曳図」屏風　六曲一双

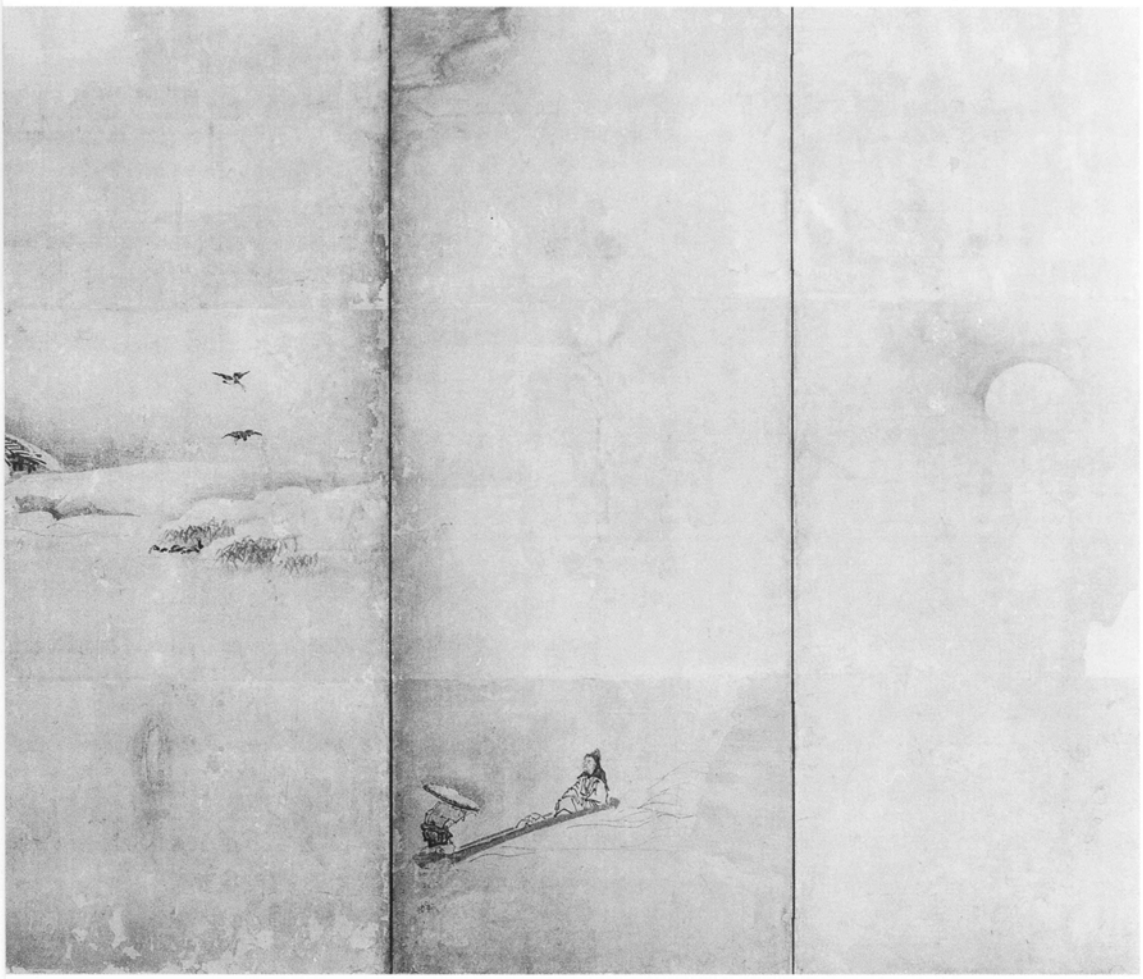
五―(一)右隻（野外奏楽図）



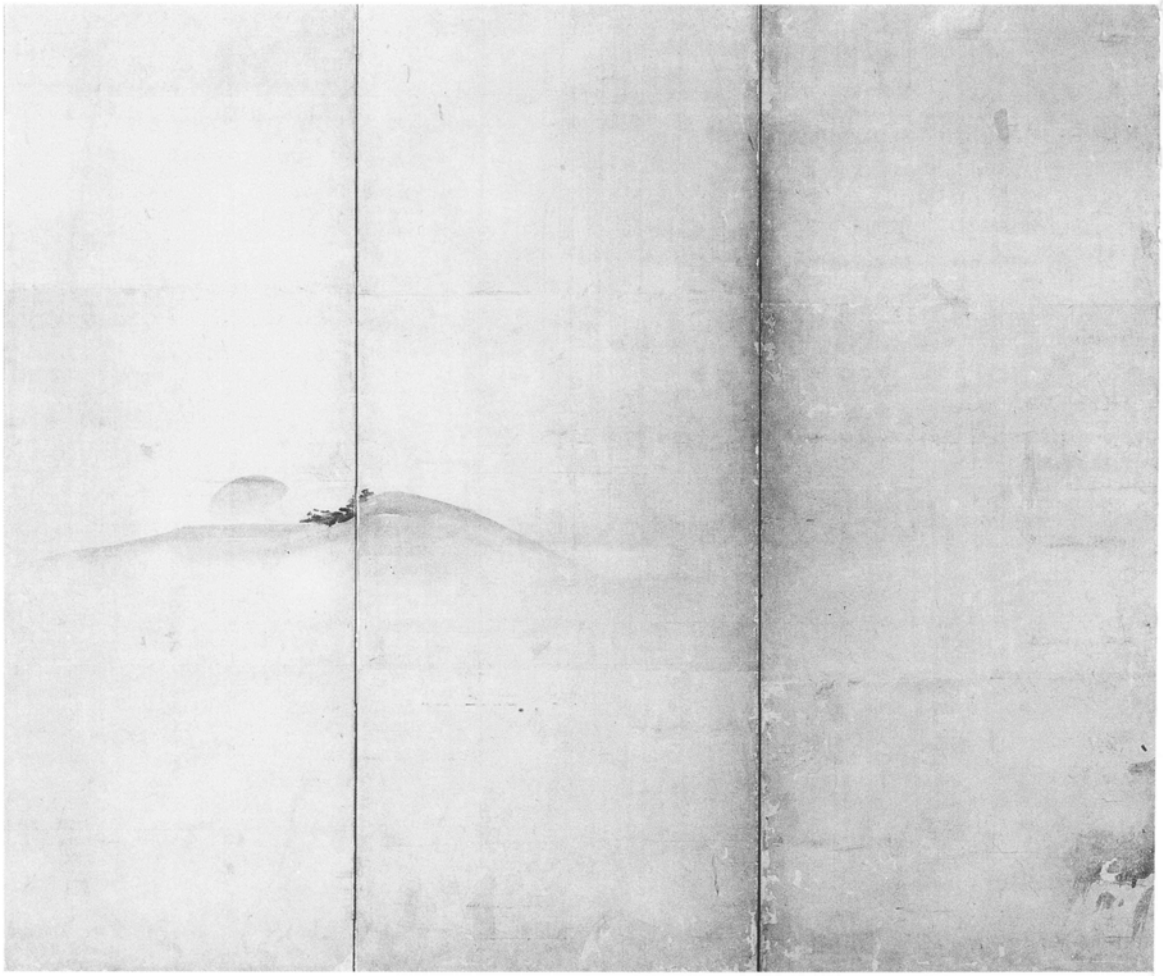
五―(二)左隻（猿曳図）

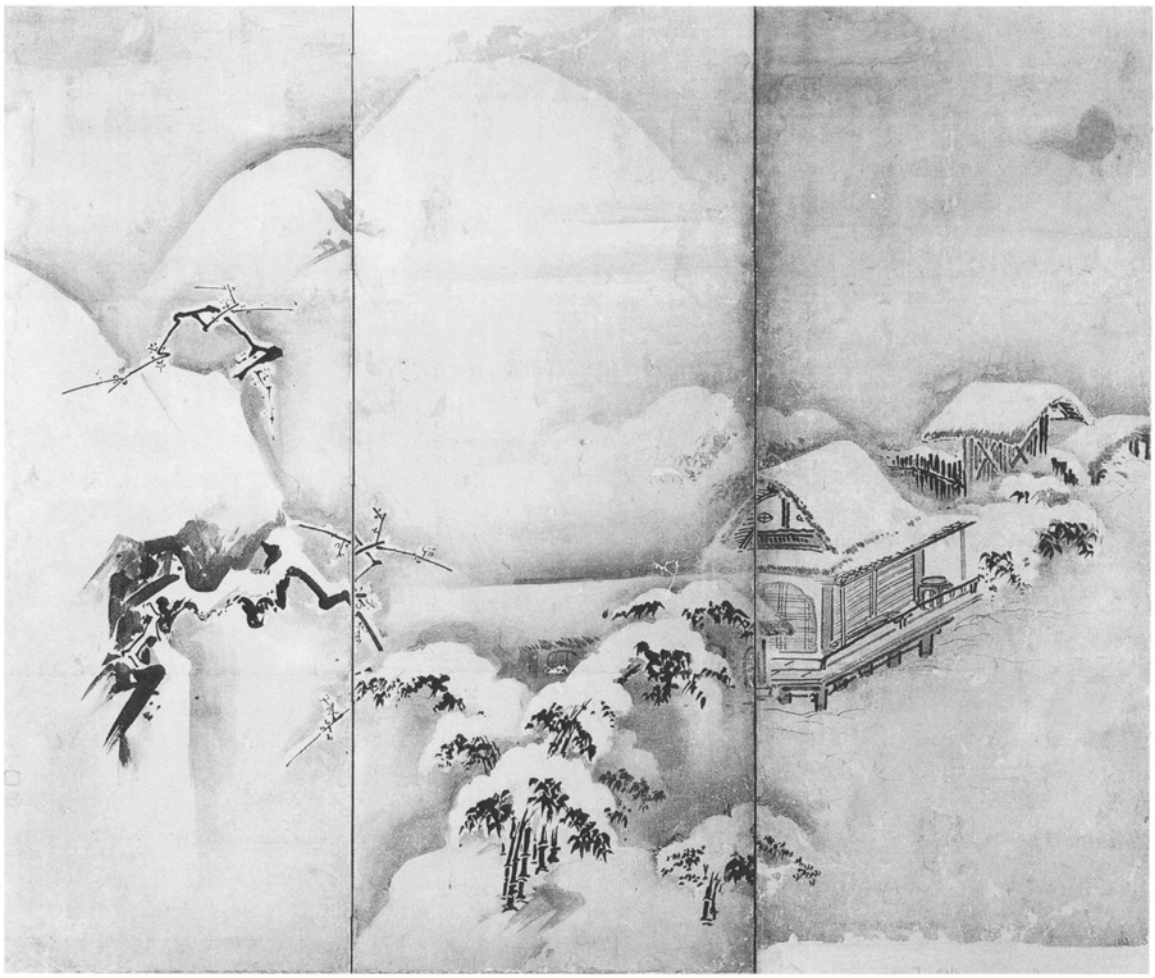
図六　「李白観瀑、剡溪訪戴図」屏風　六曲一双

六―(一)右隻（李白観瀑図）

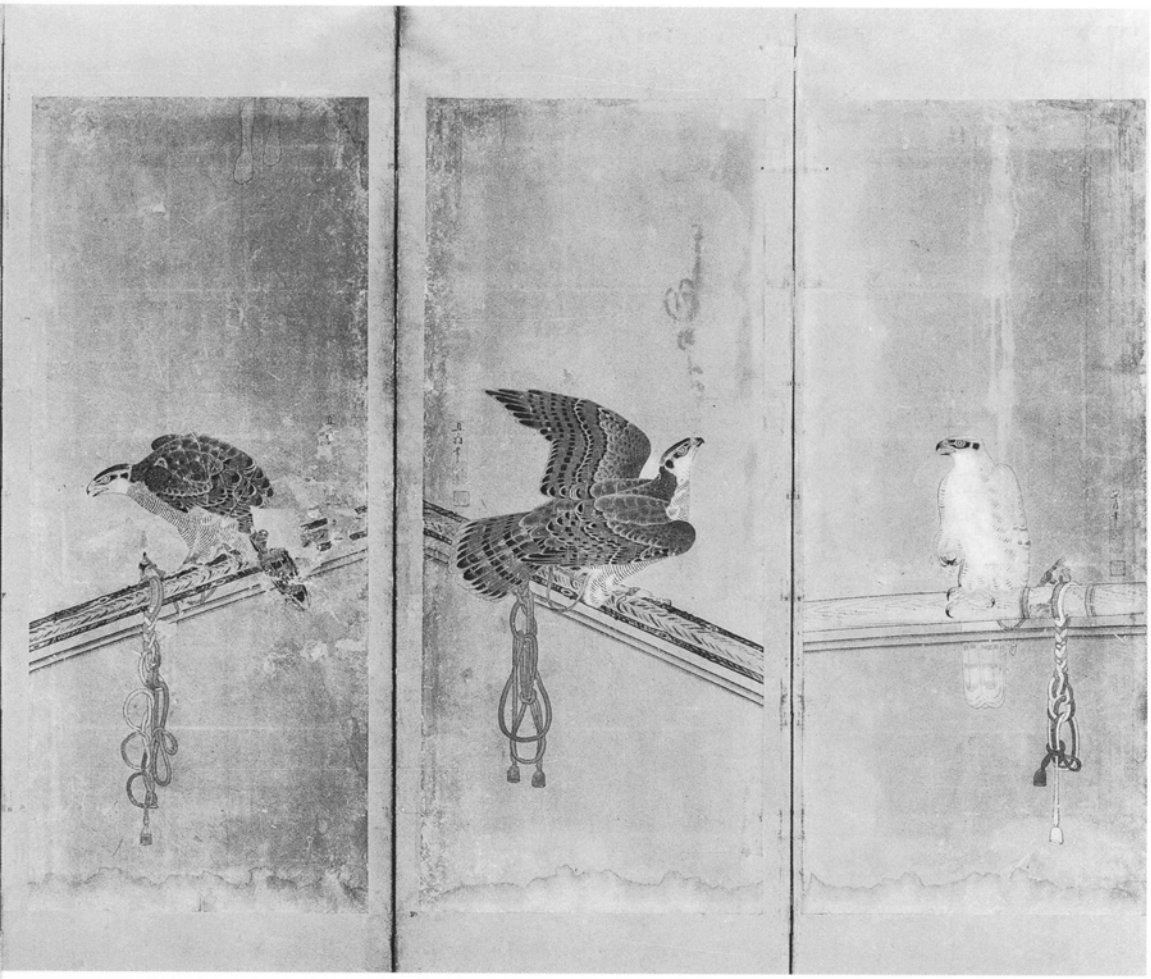


六―(二)左隻（剡溪訪戴図）

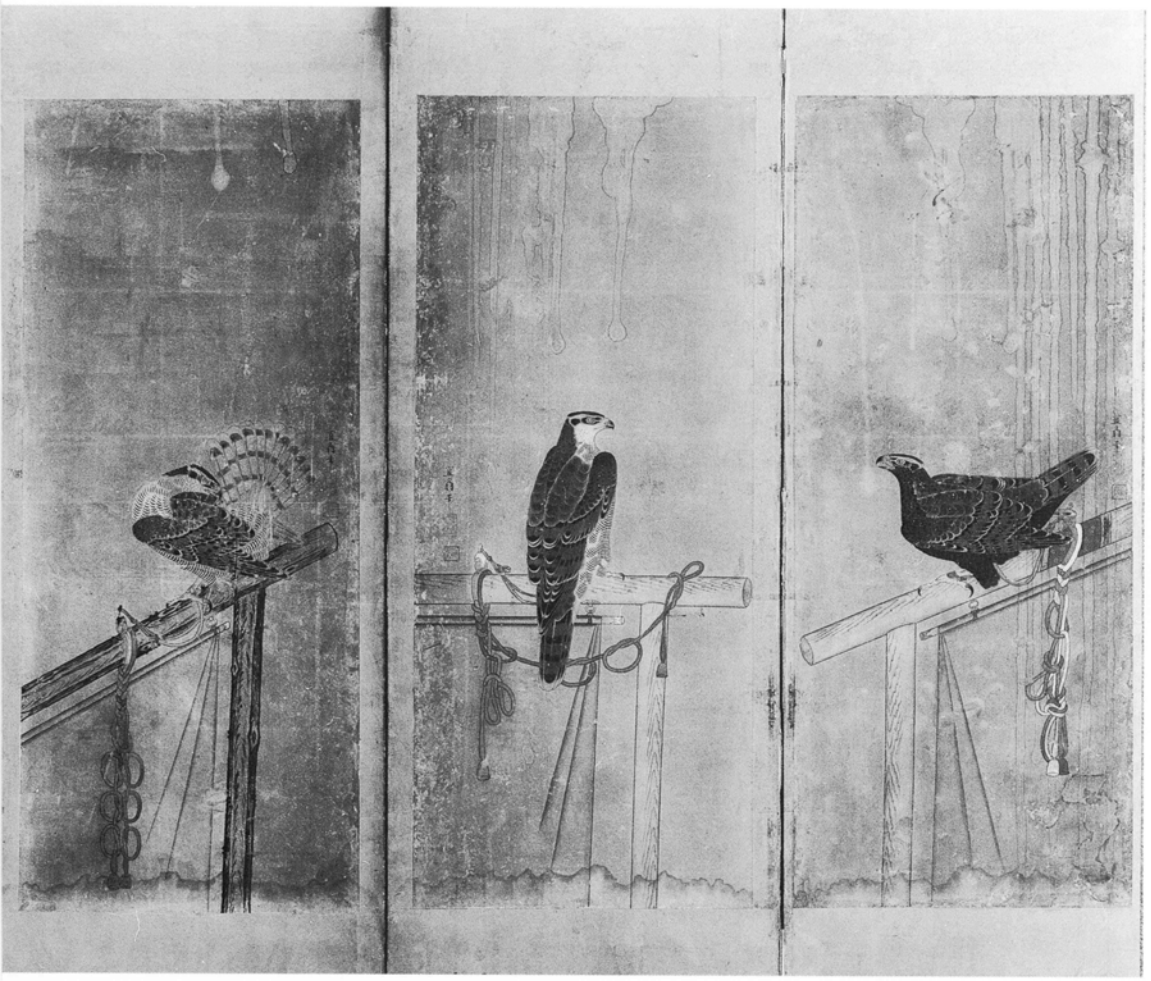




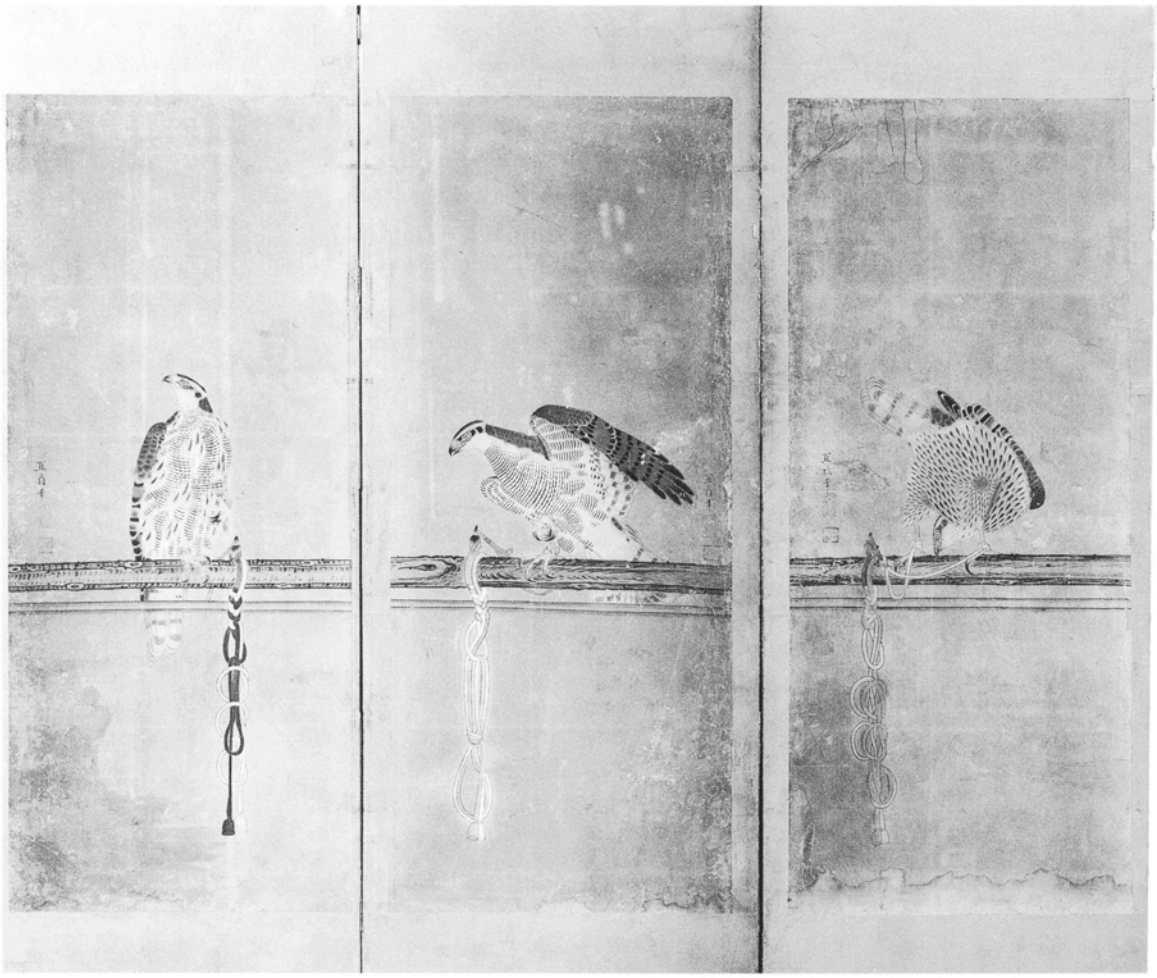
図七　「架鷹図」押絵貼屏風　六曲一双

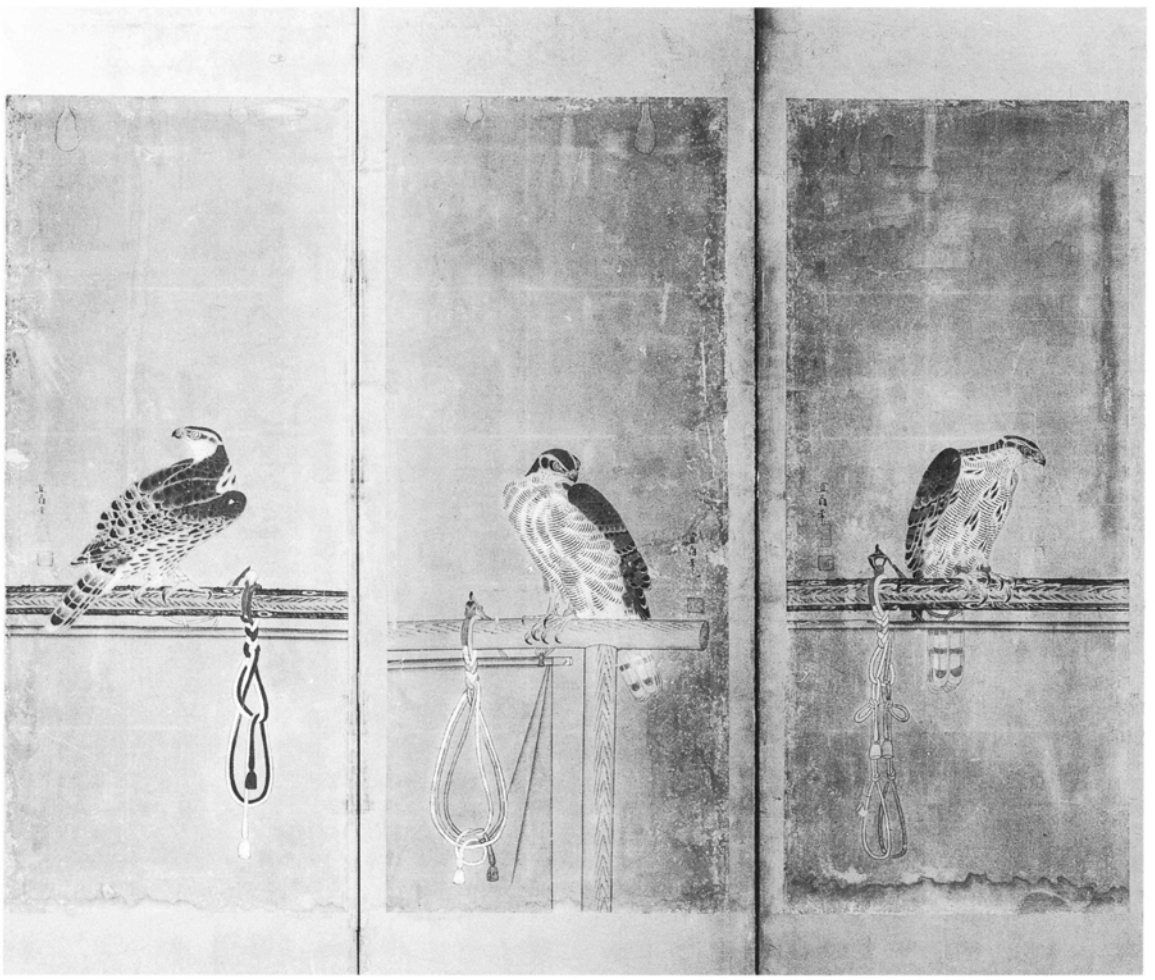


七―(一)右隻



七―(二)左隻





作品解説

図一―図三は「筑波大学和漢貴重図書目録」（六四、七〇、七一）を再録した。
図四―図七は本学芸術学研究科博士課程在学の院生による。

図一　大智度論

巻第七〇　一軸（八三二〇―一一六）

龍樹著。鳩摩羅什（姚秦）訳。
天平六（七三四）年写。物部連大山筆。
江戸時代改装。紙高二三・七cm。料紙二二枚つぎ。一紙の長さ五六cm前後（第一紙五一cm）。各紙二三―二四行（第一紙二〇行）、各行一七字。楷書。
白訓点を施す。天安二（八五八）年訓点記入。
奥書：天平六年歳次甲戌十一月廿三日寫針間國賀茂郡既多寺／物部連大山。
印記：石山寺一切経（黒印）。
石山寺本大智度論巻五〇の扉に「天安二年山階寺伝大詮大徳所講」の識語があり、本書巻第七〇の訓点もこの年に記入されたものである（参照：大矢透『仮名遣及仮名字体沿革史料』勉誠社。大坪併治「石山寺蔵大智度論加点経緯考」『国語・国文』一一巻一号）。播磨国既多寺（または気多寺）は、今は廃寺となり伝わらない。（参照：館報つくばね　二一巻三号）

図二　瑜伽師地論

巻七三　一巻　一帖　（八三二〇―一六三）

釈玄奘（唐）奉詔訳。天平一六（七四四）年写。
紙高二三・七cm。淡黄色楮紙一四枚つぎ。一紙の長さ五六cm（第一紙五三・六cm）。各行一七字。巻子本を江戸期に折帖に改装。楷書。朱点。白点。
奥書：天平十六年歳次甲申三月十五日／讃岐国山田郡舎人国足。
印記：石山寺一切経（黒印）。
山田郡は現在の木田郡の一部で高松あたりの小郡。
玄奘　仁壽二―麟徳一（六〇二―六六四）。玄奘三蔵ともよばれる。河南省陳留の人。法相・倶舎宗の開祖。インドに入り多数の経典を得て訳出した。「大唐西域記」の旅行記もある。

図三　金剛頂経瑜伽修習毘盧遮那三摩地法（金剛頂瑜伽修習三摩地法）

一巻　一軸　（八三二〇―一六六）

釈金剛智（唐）訳。〔延長八（九二〇）年以前〕写。
外題：三摩地法　池上御点本。
紙高二八cm。料紙一二枚つぎ。一紙の長さ四七・五cm（第一二紙四三・五cm）各行二〇字前後。全巻薄紙の裏打。
楷書。朱点〔天暦三（九四九）年　寛忠加点〕。
奥書：康保二（九六五）年正月廿四日授雅守法師了其間候東院（淡墨）
延長八（九三〇）年五月廿八日円堂三僧寛空大徳請書（濃墨）
天暦三（九四九）年六月十日授仁覚禪解輔算等師了（朱）
（いずれも本文とは別筆。本文はこれら年記よりやや古い時期の書写とみられる）。
印記：（巻尾）経所（写経所）。石山寺旧蔵。
本書は外題にある池上僧都寛忠が天暦三年に「ヲコト点」（朱）をつけたもの（参照：築島裕『古代日本語発掘』学生社）。

＊金剛智　総章二（六六九）―開元二九（七四一）。インドの人。一〇歳で出家のち、インド各地を歴訪して大小乗を学ぶ。中国に渡り開元八（七二〇）年洛陽に入り密教をひろめ「金剛頂経」などの訳出に努めた。病にかかり中国で没す。

＊寛忠　延喜六（九〇六）―貞元二（九七七）。平安中期の真言宗僧。宇多天皇の孫で第四代石山寺の座主。寛空に従って灌頂をうけた。仁和寺の池上に住んでいたので池上の僧都とよばれた。

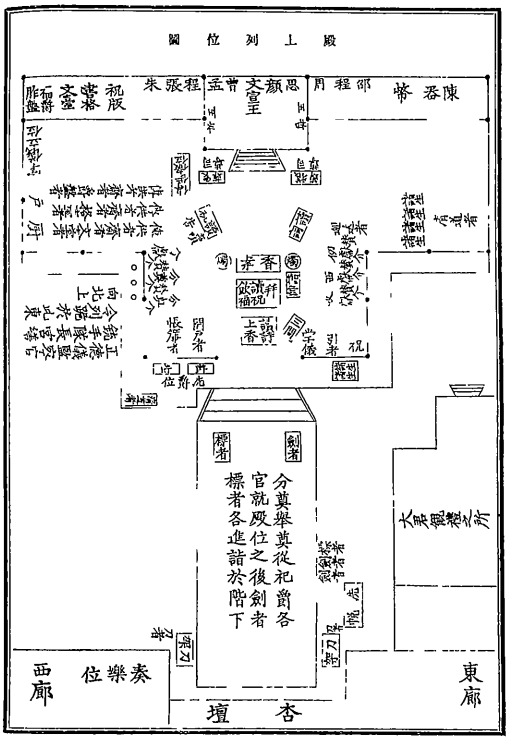
＊寛空　元慶八（八八四）―天禄三（九七三）。寛忠の師。金剛峯寺座主、仁和寺別当となった高僧。仁和寺塔中で八角の御堂の円堂院を付せられた。そこを中心に行われた「ヲコト点」を円堂点、または仁和寺点とよぶ。

図四　狩野山雪筆「歴聖大儒像」

寛永九年（一六三二）
掛幅装　六幅　紙本著色　花鳥文錦表装　牙軸
各　縦一三〇・〇　横四四・五㎝
金世濂の賛書あり
各軸の軸裏外題の部分に尊名か記され、その脇に「浅草文庫」の印あり
木箱蓋裏に中村久四郎氏による活字印刷の解説文か貼られている

歴聖大儒像は元来全二十一幅から成り、湯島聖堂（昌平坂学問所）に伝存されてきたものである。現在はそのうち伏羲、神農、黄帝、帝堯、帝舜、大禹、成湯、文王、武王、周公らの聖人と、孔子およびその四人の弟子達、顔子、曾子、子思、孟子ら儒者を描いた十五幅が、東京国立博物館に、周濂渓（周子）、張横渠（張子）、程明道（程伯子）、程伊川（程叔子）、邵康切（邵子）、朱子ら宋時代の儒者を描いた六幅が、筑波大学附属図書館に保管されている[註一]。

本館所蔵の六幅は、いずれの像も立像で、程伯子、張子、朱子の三幅は左斜め前方向きに、周子、程叔子、邵子の三幅は右斜め前方向きにて描かれている。これは、本幅が元は、釈奠という孔子を祭る儀式を行う際に、孔子像を中心に左右に従祀して掛けられていたとする『昌平誌』の記述と一致する（図参照）。因みに全二十一幅の内、孔子像のみが坐した姿態にて描かれている。また、前者三幅は画面右下に、後者三幅は左下に、朱文方形内鼎形「山雪」印が捺されており、各図とも画面右上には像主の名と賛が記されており、画面右下には「後學金世濂」の墨書と朱文方形の「伊洛開原」の落款が認められる。



孔子廟内殿上列位図（『昌平誌』巻第五「儀節誌」）
図上部に示されている「文宣王」とは孔子を指し、左右に従祀する形で示されている「顔」「曾」「思」「孟」はそれぞれ顔子、曾子、子思、孟子を指し、「周」「程」「程」「張」「邵」「朱」は本館所蔵の六幅を指している。

賛の筆者金世濂は寛永十三年（一六三六）十二月に来日した朝鮮通信使一行の副使である。この際幕府を代表して接待役を務めていた儒者林羅山は、金世濂が儒者であることを知り、著賛を要望した。その経緯は羅山（『羅山先生文集』巻六十四「聖賢像軸」）、金世濂（『海槎録』）双方の著書に記されている。また賛の語句を、羅山自らが漢籍から選出したことも記されている。（前出「聖賢像軸」）本館所蔵の六幅の内、朱子像は元・呉澄の賛を、それ以外の五幅は朱子の「六先生画像賛」（『朱文公文集』巻八十五）を典拠としている。

これより先寛永九年（一六三二）、林羅山は上野忍岡の地に、後の湯島聖堂となる孔子廟を完成させるが、羅山の息鵞峰の著「狩野永納家伝画軸序」（『鵞峰先生林學士文集』巻八十六）によると、羅山は、釈奠を行うにあたり、聖堂に納めるための歴聖大儒像[註二]の制作を企画した。儒者堀杏庵と相談の末、松花堂昭乗に依頼するも辞退され、代わりに推挙されてきたのが、狩野山雪であった。彼は、この時すでに四十三歳を数え、多くの作品制作に携わっており、画家として脂の乗った時期を迎えていた。山雪は、歴聖大儒像を描くにあたり、その粉本を明や朝鮮からもたらされた版本に求めたとも指摘されており[註三]、古画の研究も怠らなかったことが窺われる。また、画家としてのみにとどまらず、学者としての側面も持ち合わせ、儒者との交わりも多かったと伝えられる。伊達氏の例などから知ることができるように、地方においては、藩主が子息に儒学を学ばせるために狩野派にこのような聖賢図を描かせたとされ、江戸時代全国的に儒教が広まっていった背景に、儒教美術の及ぼした影響は少なくなかったとみられる。本幅は、そうした見地から、儒教とその図像化による役割を通した関係、すなわち昌平坂学問所を中心とした、林家と狩野派、そして幕府との関係を示すものであり、歴史的意義の深い作品といえる。

本館に所蔵されるに至った経緯は、略述すると、明治四年（一八七一）学問所は閉鎖され、文部省が聖堂内に設置される。旧学問所所蔵の書画・書籍類は「浅草文庫」と称する旧米倉に移され[註四]、さらにその後、当時聖堂構内にあった教育博物館（現在の国立科学博物館）に戻される。そして明治四十年（一九〇七）聖堂の祭祀が廃れてしまったことを遺憾とした東京高等師範学校（筑波大学の前身）の教官たちを中心とする同志によって孔子祭典会が創設され、祭祀を執り行ったこと[註五]までが記録により知ることができる。一方、本幅が収納されている木箱蓋裏には「孔子祭典會委員」である中村久四郎氏による解説文が貼られており、そこには「大正三年十月神嘗祭日」の日付で「二十一幅皆傳はりて、現今周張以下宋儒の六幅は東京高等師範學校にあり。其他の十五幅は東京帝室博物舘にあり。」

と記されている。また、軸裏には「浅草文庫」印及び、筑波移管の際捺された「東京教育大学附属図書館」印の他に所蔵印は捺されていない。このことから「孔子祭」を執り行うために、大正三年（一九一四）には東京高等師範学校に六幅は「保管」されていたが、それは所蔵品ではなく、あくまでも祭祀のための聖像として「保管」されていたものと推定される。尚、本館には、かつて孔子廟に掛けられていたとみられ、狩野派の手による「賢儒像扁絵」の下絵も計十四枚残されている

狩野山雪は、大正十八年（一五九〇）頃九州肥前に生まれ、慶安四年（一六五一）六十二歳にて没したとされている。（生年を天正十七年とした享年六十三歳説もある。）慶長十年（一六〇五）十六歳の時大坂豊臣家に仕えていた狩野山楽に弟子入りし、その才を認められた後に婿養子となり、狩野氏を名乗ることとなる。幼名は彦三といったが、結婚を機に平四郎と称した。名は光家。後に山雪を号し、縫殿助と通称を改める。別号には蛇足軒、桃源子、松柏山人などがある。寛永年間狩野宗家が江戸に移った後も、九条家の庇護のもと、京都に残り義父山楽とともに寛永六年から十年（一六二九―三三）頃にかけて「当麻寺縁起絵巻」に関わり、寛永八年（一六三一）には妙心寺天球院障壁画を手がけている。寛永十二年（一六三五）山楽没頃までには、名実ともに京狩野派の中心と目されていたと見られる。生保四年（一六四七）には九条幸家の命により、東福寺蔵の「三十三観音図」のうち二図を補作した功績をもって、法橋に叙せられる。代表作には「歴聖大儒像」のほか「雪汀水禽図」屏風、「龍虎図」屏風などがあげられる。

また、林羅山、鵞峰親子をはじめとして、堀杏庵、藤原惺窩ら儒者との親交も厚く、学者肌をも持ち合わせていた山雪は、画家の伝記資料を調査、整理し、体系的な絵画史をまとめることを試みた。これを息永納が『本朝画史』として完成させている。

註一　宋儒六人の名称及び掲載順については、筑波大学附属図書館の所蔵目録名、所蔵順に倣う。
周濂溪（周子）一〇一七―七三　周敦頤ともいう。濂溪は号で、濂溪先生と称された。字は茂叔。朱子（朱熹）の顕彰により、朱子学の第一人者として崇敬された。大極説を唱え、朱子学（道学）の宇宙論の確立に寄与した。著書に『通書』『大極図説』がある。
張横渠（張子）一〇二〇―七七　張載ともいう。横渠は号で、横渠先生と称された。程子兄弟と交わり架く、朱子学創始の一人。主著『正蒙』において気の哲学を展開する。
程明道（程伯子）一〇三二―八五　程顥ともいう。明道は号で、明道先生と称された。周濂溪に学ひ、弟程伊川と共に二程子と並称されるか、その人柄、学風は対照的で、伊川か「秋霽烈日」と称され、事物の分析と論理化に鋭い刃えをみせたのに対し、明道は「春風和気」と称され、融合的、直観的であった。宇宙の本体を乾元の気とし、理を基礎とする道徳説を唱える。著書に『定性書』かある。
程伊川（程叔子）一〇三三―一一〇七　程頤ともいう。伊川は号で、伊川先生と称された。謹言徳行、周濂溪に学ひ、性理の学を大成。理気の説を提唱する。著書に『易伝』『伊川文集』『経説』なとかある。
邵康切（邵子）一〇一一―七七　邵雍ともいう。康切は諡。一生を市井の隠居として終わったか、政界の重鎮や程子兄弟なとの学者と交友。主著『皇極経世書』において壮大な宇宙論的歴史観を展開する。彼は朱子学（道学）の系譜からすれるものの、その易学は朱子（朱熹）に大きな影響を与えた。
朱子（朱熹）一一三〇―一二〇〇　南宋時代の思想家て、北宋以来（周濂溪　張横渠、程子兄弟ら）の理気世界観に基つき、儒学の新休系、いわゆる朱子学を大成させる。朱子はその尊称。著書には『詩集伝』『周易本義』なとかあるほか、『朱文公文集』や『朱子語類』なとか伝わる。

註二　羅山の文書（『羅山先生文集』巻六十四「聖賢像軸」）においては「聖賢図像二十一幅」と記されており、「歴聖大儒像」の名称は、羅山の息鵞峰の著「狩野永納家伝画軸序」（『鵞峰先生林學士文集』巻八十六）において出てくる。

註三　杉原たく哉氏「狩野山雪筆歴聖大儒像について」によると、宋儒六人は『歴代古人像賛』（明　弘治十一年（一四九八）刊）を粉本に顔面部を描き分けているという。さらにこうした版本に基ついた絵画を仏教美術に倣い「儒教美術」と分類し、山雪筆「歴聖大儒像」を近世儒教美術の嚆矢と位置付けている。

註四　阿部弘蔵「茂草文庫」学鐙第七年十一号　明治三十八年（一九〇五）参照

註五　孔子祭典会々報　第一号　明治四十年（一九〇七）参照

参考文献
『日本美術全集　狩野山楽　山雪』土居次義　集英社　一九八一
高木三男「歴世大儒像（聖賢像軸）」筑波大学附属図書館報つくはね　九―三　一九八三
杉原たく哉「狩野山雪筆歴聖大儒像について」美術史研究（早稲田大学）三十号　一九九三
鈴木健一「儒教と題画文学―林羅山の題画詩について」国文学解釈と鑑賞　一九九八
守屋正彦「筑波大学か受け継いた江戸幕府の「学」の象徴―狩野山雪筆「歴聖大儒像」について」
筑波フォーラム（筑波大学）五十五号　二〇〇〇

（中根恭子）

図五　狩野探幽筆　「野外奏楽・猿曳図」

江戸初期（一六五〇―一六六〇）
屏風　六曲一双　紙本水墨
右隻　縦一五〇・八　横三四八・〇㎝（外寸縦一六九・四　横三六六・七）
左隻　縦一五〇・八　横三四八・〇㎝（外寸縦一六九・八　横三六六・六）

右隻の前景に松樹が生え、奥の家屋の庭先には高士らしき人物が琴を弾じている。右に幼子を抱く婦人が微笑み、子は身を乗り出して琴の音に手を差し伸べている。二扇目から四扇目にかけて、笛、太鼓、鉦などを囃して舞い踊る人物を、二人ずつ三組、対角線上に配す。遠景にうっすらと山並みが見える。左隻には、橋を渡る童子の指し示す方向に、猿曳がいる。手前に一人が腰を下ろし、樹下に四人が楽しそうに見物する。左端の家屋から出てきたらしい男も、二本の樹の間に覗く。人々の視線や指先は、猿曳に集中している。近景でまとめた草体風の画面であり、様々な対角線を描く安定した画面構成には緻密な計算と配慮が伺える。

新出のこの屏風は、主に画風や落款から、作者は狩野探幽、制作年代は斎書き時代の後半と鑑定された。構図や作風の近いものとして、やや時代は早いが、静岡県立美術館蔵の「七賢九老図屏風」（六曲一双）が挙げられる。探幽は、狩野孝信の長男に生まれ、祖父永徳に代表される桃山時代障壁画の様式を脱し、新たな江戸様式を生み出した。その作風は、一般に淡白瀟洒と表現される。幕府の御用絵師たる地位と強大な組織力により、江戸時代の狩野派の礎を打ちたてたことでも名高い。

左隻左端、右隻右端に、それぞれ「探幽斎筆」の署名と、「法眼探幽」の朱文円印がある。屏風の保存状態は必ずしも良好とはいえず、例えば右隻の琴を弾く人物の顔が損なわれるなど、全体にわたって剥離や虫食いがみられる。また左隻の一扇目、二扇目は、墨色が際立って薄く、三扇目への続き具合も滑らかではない。伝来、改装、補筆の有無など、詳しい調査が待たれる。

漢画において、猿曳という画題は、遅くとも桃山時代からしばしば描かれていた。探幽には大徳寺本坊方丈の衣鉢の間に「猿曳図」がある。この作品はすでに焼失してしまったが、写真で見る限り、当屏風の猿回しは、図様、筆致の面でこれによく似ている。また鬼原俊枝著『幽微の探究』に所在不明の「猿曳図」が図版で紹介されているほか、「四季耕作図」の秋景にも、猿曳が描き込まれている。

知恩院の「猿曳図腰障子」は探幽の弟、尚信の作とされる。猿曳たちと見物人を一場面に描いたもので、図様、作風の面では探幽に酷似する。注目されるのは、この図と姿形のよく似た人物が、当屏風の右隻に見出せることである。例えば、尚信は曲芸の伴奏に、撥を振り上げ太鼓をたたく人物や、見物する母子の姿を描くが、探幽の屏風では同じ人物が奏楽場面に配されている。この二作品の比較によって、もともと猿曳図としてあった画面のモチーフを探幽が再構成し、新たに二画面に仕上げようとした過程が推察されるだろう。

狩野派以外の作品では、猿曳図を描いた早い作例として、永青文庫所蔵の伝雪舟筆「琴棋書画図」（六曲一双）が想起される。作風や筆致は異なるものの、猿曳をはじめ、楽団や母子、鶏など、当屏風に共通するモチーフが、すでにこの画中に散見される。このほか、右隻では松樹、家屋、岩の位置関係や、右へ曲がって一度画面をはみだし、再び枝先が、右上から左下にさがる松の描き方、左隻の橋からV字形を成す二本の樹木までの構成など、部分的な構図や姿形に共通項が多い。

複数の源泉と何段階もの試行錯誤を経て生み出された当屏風の画面は、大胆な省略法、対角線を軸にした構成、左右で相称する余白や、柔らかい筆致によって、探幽らしい画趣に溢れている。

狩野探幽は、慶長七年（一六〇二）、孝信の長男として京都に生まれた。名は守信。幼名は宰相。采女。慶長十七年（一六一二）十一歳で駿府城の家康にお目見えし、以後、江戸幕府との結びつきを強めてゆく。元和三年（一六一七）十六歳で幕府御用絵師となり、元和七年（一六二一）鍛冶橋門外に千三十三坪の屋敷を拝領し、鍛冶橋狩野家を確立。尚信、安信らと共に、代々御用絵師をつとめる奥絵師として、一門の頂点に立つ。寛永十二年（一六三五）には大徳寺の僧、江月宗玩から探幽斎の号を授かる。寛永十五年（一六三八）絵師としてはじめて法眼に叙され、さらに寛文二年（一六六二）には最高位の法印となる。延宝二年（一六七四）七三歳で没するまで、画業を続け、輩下の指導にあたった。

探幽の画歴は、次の三期に分類されている。

一、采女時代　元和三年（十六歳）―寛永十一年（三十三歳）
　落款に「采女」を用いる。代表作は、二条城二之丸障壁画、名古屋城上洛殿障壁画など。

二、斎書き時代　寛永十二年（三十四歳）―万治三年（五十九歳）
　落款に「探幽斎」を使用。東照宮縁起絵巻、大徳寺方丈障壁画、聖衆来迎寺客殿障壁画、佐久間将監像など

三、行年書き時代　寛文元年（六十歳）―延宝二年（七十三歳）
　六十歳から、落款に行年何才と書き入れるようになる。帝鑑図屏風、周茂叔・林和靖図屏風、大徳寺玉林院客殿障壁画、楠公訣別図など

参考文献
『狩野探幽』日本美術絵画全集　第十五巻　集英社　一九八〇
『漢画系人物』日本屏風絵集成　第四巻　講談社　一九八〇
『狩野探幽』日本の美術一九四　河野元昭　至文堂　一九八二
『探幽の追求』狩野探幽論　本文篇　図版篇　鬼原俊枝　大阪大学出版会　一九九八
『狩野探幽の絵画　江戸初期　抒情美の世界』静岡県立美術館　一九九七
土居次義「知恩院障壁画の一考察」仏教芸術四六『近世日本絵画の研究』美術出版社　一九七〇
ほか多数　紙面の都合で割愛させていたたきました。

（横島菜穂子）

図六　狩野尚信筆「李白観瀑、剡溪訪戴図」

江戸初期（一六四〇―一六五〇頃）
屏風　六曲一双　紙本水墨
右隻　縦一三六・七　横三二一・二㎝
左隻　縦一三六・八　横三二一・八㎝

右隻の「李白観瀑図」は、二扇目に瀑布と童子が、三扇目に李白と川、そして流れ落ちる滝が配され、木屏風の主題である李白観瀑が描かれる。五から六扇目には大きな空間を伴って山の端に顔を覗かせる太陽が描写される。

李白は唐代の詩人で、字を太白と言う。諸方に旅することが多く、廬山を訪れた際に瀑布の雄大さを詠んだ事が李白観瀑の故事として広く知られる。水墨画の

画題としても李白観瀑は古来多く取り上げられてきた。李白観瀑には李白が立って瀑布を眺めるものと座しているものがあるが、本図のように座した李白を描いた例として他に惟肖得厳賛李白観瀑図、岳翁による李白観瀑図が挙げられる。また尚信の弟安信にも同様の作例が見られる。惟肖得厳による李白観瀑の題詩七絶一首が画面上部に記された作例においては、李白は童子を伴って右向きに座し瀑布と向かい合う。また岳翁の観瀑図においては、李白は手を膝に乗せ左向きに座しており、背後には童子を伴う。安信の観瀑図においては、李白は姿勢を崩し、右を向いて瀑布を正面から眺望する。背後には童子を伴う。以上の三点ではいずれも李白は瀑布の正面に座し、見上げるように瀑布を眺める。しかし尚信の作例では李白は二扇目の瀑布を正面ではなく右手に望み、その視線は上方に向けられるのではなく五、六扇目に描かれた山際に浮かぶ太陽か、あるいは下方に流れ落ちる三扇目の滝に注がれているように見える。また他の作品ではいずれも李白のすぐ背後に童子が描写されているが、尚信の作例は異なる。これらの点において本図は特殊であると言えよう。

左隻の「剡渓訪戴図」は、一扇目に月が描かれ、二扇目には戴安道を訪ねる子猷が配される。四扇目から五扇目にかけては戴安道の家が描写されている。

「東洋画題総覧」によれば、剡渓訪戴とは、子猷がある夜月を眺めつつ酒を飲み、ふと剡渓に戴安道がいるのを思い出し即刻船を出して戴安道の家の門前まで行ったが、結局門を叩かずして帰ったという故事を指す。狩野元信が霊雲院衣鉢乃間に描いた雪中山水図中に剡渓訪戴を描いた部分があるが、幾つかの点において尚信の作品と図像上の類似が見られる。尚信が直接作品を参考とし、単独の図像として構築しなおした可能性も考えられるであろう。具体的には、子猷の乗る船の角度、戴安道の家の右上方に位置する雪のかかった半円状の橋、画面左端に位置する隆起した岩肌と斜め右上方に向かって伸びる松などに図像上の類似を認めることが出来る。

本屏風は、右隻と左隻に太陽と月が対となって配置されており、日月山水図として扱うことができよう。また観瀑が描かれることから右隻が夏景山水図、雪中であることから左隻は冬景山水図とし、夏冬山水図とみなすこともできる。構図上では画面の両端から中央に向けて徐々に空間が拡大していく表現が見られ、太陽と月を中心に右隻、左隻が左右対称となっている。

なお本図においては左右両図の外側の端に、それぞれ二つの印が捺されている。上下に並んだ印のうち上方のものは正方形の角が丸みを帯びたような形状である。文字は「狩野」と記されている。下方のものは，壺のような形状を持った特殊なものである。「古画備考」にはこの印は自適斎の款記を伴い紹介されている。

狩野尚信は慶長一二年（一六〇七）に狩野孝信の次男として生まれ、兄探幽、弟安信らと共に、江戸初期の狩野派の礎を築いた重要な画人と目される。幼名を三位と名乗り、後に一信または家信と称し、さらには尚信と改めた。通称を主馬、剃髪してからは自適斎と号している。探幽、安信と共に、狩野光信の門人で堅実な画風を持って知られた狩野興以に画技の教育を受け腕を磨いた。元和九年（一六二三）一七才のとき上洛していた徳川家光に謁見し、また寛永三年（一六二六）には兄探幽らと共に二条城行幸殿に作品を残している。同城二の丸の黒書院に現存する障壁画は尚信によって主要部分が描かれたと推察される。寛永七年（一六三〇）には江戸に下ると共に徳川秀忠に謁見し幕府の御用絵師となった。尚信は木挽町狩野派を開き、息子常信と、その子孫は江戸狩野の中でも最たる繁栄を築くことになる。比較的短命であった為現存する遺品はそれほど多くはないが、寛永一九年（一六四二）聖衆来迎寺客殿に兄探幽と共に描いた「商山四皓図」「竹林七賢図」、また「瀟湘八景図」屏風（東京国立博物蔵）はその代表作に数えられる。

（渡邉 晃）

参考文献

『古画備考』朝岡興禎著　太田謹補　思文閣　一九〇四（昭和四十五年復刻）

『復刻版東洋画題総覧』図書刊行会　一九九七

『日本美術絵画全集』全十一巻　集英社　一九八一

『水墨美術大系』全十五巻　講談社　一九七三―一九七七　他

図七　田村直翁筆「架鷹図」

江戸時代・元禄（一六八八―一七〇三頃）

押絵貼屏風　六曲一双　紙本著色

右隻（外寸　縦一七八・二　横三七六・〇㎝）　左隻（外寸　縦一七八・〇　横三七五・五㎝）

右から　縦一二七・九　横五十三・二㎝　縦一二七・九　横五十三・一㎝

縦一二七・九　横五十三・二㎝　縦一二七・九　横五十三・四㎝

縦一二七・九　横五十三・四㎝　縦一二八・〇　横五十三・四㎝

縦一二七・九　横五十三・四㎝　縦一二八・〇　横五十三・六㎝

縦一二八・〇　横五十三・三㎝　縦一二八・一　横五十三・四㎝

縦一二七・八　横五十三・二㎝　縦一二七・九　横五十三・三㎝

本作は、江戸時代前期の画家、田村直翁筆の押絵貼形式による架鷹図である。

『東洋画題総覧』では、鷹について、「芸術には交渉極めて深く、英雄独立、振威八荒などの画題となり或は松の老樹に配せられ、或は架に据えたる処を描くなど枚挙に遑もない」とし、さらに鷹を描いた名作として、徽宗皇帝作と伝えられる天竜寺蔵の架鷹図から雪村や曾我直庵、狩野派の松鷹図をあげている。これらの作品をはじめ、数多い鷹図を見ても、愛玩の鷹を記録する目的で制作された、いわば鷹の肖像画とも言うべきものから、山川草木によって構成された奥行きある背景の中を、生き生きと躍動する様を描いたものなど、その描写は様々である。本作のような架鷹図も、少なからぬ類例を持つ鷹図の一つであって、背景を排し、水平あるいは斜めに配された止まり木に鷹狩用の鷹をおき、さらにその脚を止ま

り木に繋ぐ大緒と、止まり木から垂れる架絹（ほこぎぬ）とが描かれる。このような架鷹図の場合、その多くが、一扇一扇が独立している押絵貼形式をとる。本作も六曲一双、全一二面からなる押絵貼屏風であり、各扇に架鷹一幅を貼り、二扇を対幅とし、落款、捺印がされている。

架鷹図では、一幅一幅に描かれる鷹の姿形や大緒の結びが全て異なっているため、実にバリエーションに富んでいるように見える。鈴木廣之氏は押絵貼屏風形式の架鷹図について述べた論文の中で、架鷹図に見られる鷹の姿形のほとんどが、花鳥画等の粉本類から主題とは無関係に集められたものを、左右対称・点対称に、または変容させて転用したものであるとし、さらに、こうした類型化こそが、屏風絵としての統一感とリズムを生み出す上で重要であると指摘している[註一]。

これに従えば本作を見ると、右隻の場合、一番目の鷹と六番目の鷹、二番目と五番目、三番目と四番目という組み合わせが、一つのポーズや動きをもとにしたものと考えられなくもない。また粉本類からの転用については、本作でも幾つか確認できる。例えば、右隻・二番目の鷹は、岡山県立博物館所蔵の架鷹図（六曲一双）の鷹（左隻・四番目）と酷似しており[註二]、右隻・五番目の鷹は、曾我直庵の架鷹図（六曲一双）の鷹（左隻・二番目）を反転させたものと似ている。架鷹図だけでなく、例えば右隻・三番目の鷹は、直庵筆の「松柏に鷹図」[註三]の鷹との類似点が指摘でき、同様に左隻・一番目の鷹は曾我二直庵筆の「柏鷹蘆鷺図」（六曲一双、水墨　大徳寺）左隻中岩にある鷹に、また左隻・三番目の鷹も尾羽の描写に違いがあるものの、やはり二直庵筆の「花鳥図」（六曲一双、着彩　東京国立博物館）左隻の鷹（岩上）と似通っている。さらに粉本からの変容ということを考えれば、本作中最も複雑で動きのある右隻・三番目の鷹も、曾我二直庵の架鷹図（六曲一双　ボストン美術館蔵）の左隻・二番目の鷹の姿形を逆側から見た図と考えることもできる。なおこの姿形は、他の架鷹図・花鳥図でもよく見られるもので、例えば狩野探幽筆の「松に鷹図」（二条城二之丸御殿障壁画）では、二直庵のものと同じくこちらに背を見せる図様となっているが、脚の様など本作を思わせる。本来は花鳥図において、獲物に襲いかかる直前の姿をとらえたこの姿形が、架鷹図にも見られることは興味深い。

本作の作者である直翁については、資料が乏しく、生没年等一切分かっていない。『古画備考』に「画家一覧、為直庵弟子」とあり、さらに朱字「田村」の長方印と朱字「直翁」の方印を示した下に「白鷹架上、着色紙立、不器用な物」との注記があるのみである。この記載から曾我派に連なる画家とされている。このことはまた、先述した直庵や二直庵の鷹図との類似からも肯首できるところであろう。おそらくは鷹図を得意としていたと思われ、数少ない遺作の全てが鷹を主題にしたものである。

これまで直翁筆として確認されている作品のうち押絵貼屏風としては[註四]、

①品川東海寺本（六曲一双、着彩・淡彩・水墨の混合）[註五]

②個人蔵本（六曲一双、水墨）

③ボストン美術館本（双幅、水墨）[註六]

④個人蔵本（双幅、水墨）[註七]

⑤個人蔵本（二曲一隻、着彩）[註八]

の計五点で、今回の筑波大学本を加えてもわずか六点にすぎない。このうち③④の双幅は、もとは押絵貼屏風であったことが辻惟雄氏によって指摘されている[註九]。押絵貼屏風として本来の状態を保っているのは、①と②だが、①は自然の風物や背景などが描き込まれており、冒頭で述べたような、いわゆる架鷹図ではない。②は筑波大学本と図様が似るが、水墨である。一方、筑波大学本は、鷹、止まり木、大緒、架絹が描かれた、いわば架鷹図の形式に忠実な図例であると同時に、鷹の姿形や縄目の複雑な意匠に見られる克明な描写には、作者の工夫と技量の高さが窺われる。剥落があるものの、当時の彩色を損わず、しかも落款の上に「直翁筆」の署名が認められる筑波大学本は、貴重な作品であると言える。

ところで、右隻・二番目の幅中、鷹の頭上に奇妙な形のしみがある。屏風を重ねて収納した際についた跡と考えられるが、その形は縄目のようにも見える。このことについては今後の研究を必要とするが、この形が大緒のものと仮定するならば、あるいは他の架鷹図が本作とともに所蔵されていた可能性も出てくる。

最後に本作の制作年についてであるが、田中喜作や土居次義氏、辻氏とも、直翁を江戸時代初期、もしくは元禄年間に活躍した画家としており[註十]、それに従った。

註一　鈴木廣之「押絵貼り屏風形式の架鷹図について」『日本屏風絵集成第一二巻　風俗画　公武風俗』講談社　一九八〇

註二　この、岡山県立博物館本について、複数の図版を参照したところ、押絵貼の順に若干の移動か見られた。これに関し、註一の鈴木論文掲載図版か、現在の押絵貼の形式に従うものであることか明らかになった。岡山県立博物館学芸員の中田理枝子氏の御教示による。

註三　『日本美術全集17 桃山の障屏画　永徳／等伯／友松』学習研究社　一九七八

註四　押絵貼屏風ではないか、直翁筆として「松梅に鷹図」（六曲一双、金地濃彩）も確認されており、こちらは樹木に遊ふ鷹か描かれている

註五　土居次義「東海寺の田村直翁」『日本近世絵画の研究』美術出版社　一九七〇

註六　前掲註五

註七　田中喜作「研究資料　稀蹟雅纂（二）」『美術研究』第六三号　一九三七

註八　この作品及び②については、東京大学の河野元昭教授の御教授による

註九　辻惟雄「松梅に鷹図」『古美術』第二九号　一九七〇

註十　例えば辻氏は、前掲註九の論文の中で、「松梅に鷹図」には、江戸時代中期の雲谷派との共通性が見られるとし、その点から直翁を元禄年間前後、二直庵（生没年不詳たが、一六五六年に生存が確認されているという）から一世代後に属する画家とされている。

参考文献

鈴木廣之「押絵貼り屏風形式の架鷹図について」『日本屏風絵集成第一二巻　風俗画　公武風俗』講談社　一九八〇
辻　惟雄「松梅に鷹図」『古美術』第二九号　一九七〇
土居次義「東海寺の田村直翁」『日本近世絵画の研究』美術出版社　一九七〇

（伊藤たまき）

電子図書館と高精細画像

小西　和信

一　はじめに

今回の展示品の中心をなす狩野探幽らの新出屏風発掘のきっかけは、電子図書館のメニューの一つとして提供されている狩野山雪筆の「歴聖大儒像」の画像であった。展示会の企画を立案中の守屋助教授（本学芸術学系）が、図書館で所蔵する美術品のことを体芸図書館（筑波大学内の四つの図書館の一つ）の館員に尋ね、紹介された朱子像を端末で見たことから一連の発掘劇がはじまることになるのである。

この朱子像は、八×十インチのフィルムで撮影された写真から千六百dpi、一万×三万ピクセル、八百メガバイト（非圧縮のTiff形式の画像）程度のフルカラーの電子画像を作成し、それをJPEG圧縮し、FlashPix（LivePicture社らが提唱）というフォーマットに変換したもので、フリーにダウンロード可能な閲覧ソフトで見ることができる。

掛軸にされた肖像画が保管されている中央図書館から離れた場所にいたにもかかわらず、インターネット上の高精細画像によって作品の内容や雰囲気を詳細に確認できたことが、それに続く発掘のドラマを導くのに大きな力があったと守屋助教授の後日の談である。だとすれば、高精細画像を提供している側の一人として、これは具体的な効果の好例であると理解し、胸をなでおろす一方で少し意を強くしているところでもある。

二　筑波大学電子図書館

筑波大学附属図書館では、平成十年三月から電子図書館というサービスを始めている。文部省の学術情報政策の一環で始められた「先導的電子図書館プロジェクト」の一つに選ばれたからである。平成九年に北原元図書館長（現学長）の下でまとめられた『高度発信型電子図書館システムの考え方（基本構想）』によると、筑波大学電子図書館の基本理念は、本学で収集・生産・蓄積された学術的価値の高い資料の原文を電子化し、全世界に向けて発信していく、とされている。

この考え方に基づき、平成十一年度末現在で、（一）蔵書目録（約百六十万件、全蔵書の八十二％）、（二）研究紀要（三十種）、（三）学位論文（約七百件）、（四）研究成果等（約百三十件）、（五）貴重書（モノクロ画像）（約二千件）、（六）貴重書（カラー画像（十七件）、（七）その他：図書館利用案内、概要、電子展示、リンク集などの電子化コンテンツを作成し提供している。他に、契約の関係上でキャンパス内に限定にせざるを得ない各種のデータベースや電子ジャーナルなどのサービスを総合して、いまや実用的なツールとして欠かせないサービスとして位置づけられる段階に至っている。

利用状況としては、電子図書館のトップページのアクセス回数を指標とすると、平成十一年度一年間で約四十万回で、実際の図書館への入館者数七十七万人の半分程度と健闘しているのである。開始したばかりの一昨年度に比べ五十％以上の増加が見られ、コンテンツの充実に比例して利用者が増えていくものと考えられる。学外からの利用も全体の三十％強あり、大学の情報発信の役割の一翼を担っているものと評価している。

このような電子図書館サービスの意義をどう捉えるかについては、現時点では感想の域を出ないものでしかないが、（一）豊富な学術情報の提供、二十四時間サービス、非来館型の利用、さまざまな利便性の提供など「図書館サービスの高度化」を図るものであること、（二）開かれた図書館（図書館の公開）を一層促進するものであること、（三）原資料代替物の提供による保存問題への寄与、（四）相互に電子図書館を利用しあうことにより従来以上に図書館間の連携が図られること、などの点をメリットと考えている。

三　高精細画像の作成と提供

本学の電子図書館コンテンツは、学内生産資料（学位論文、研究紀要等）の全文情報も貴重書も紙である現物からスキャナーで百から二百dpi程度の解像力のTiff形式の画像を作成し、GIF画像で提供してきた。しかし、今年の三月に、印刷への対応やファイル管理等の問題からAdobe社

の提案するPDFというフォーマットで提供することに方針変更した。環境や技術の変化の激しい昨今にあっては、この種の方針変更は今後も避けられないものと認識している。

貴重書からの画像作成の基本的な方針としては、（一）マイクロ化されていないものは、マイクロ化と電子化を同時に行うこと、（二）マイクロ化されているものは、利用頻度の高いものから計画をたてて電子化すること、（三）色刷りページのあるもの、古地図等は、カラー画像を作成すること、（四）対象資料に応じて作成方式や精細度の使い分けを行うこと、などが確認されている。着手の順序としては、保存の観点を重視し、（一）のマイクロ化との同時方式を優先することにした。一方、筑波大学に伝わる代表的な貴重書については、予算の許す限りフルカラーの高精細画像を作成することとした。

われわれが着手する時点ですでに、岡山大学池田家文庫の地図、徳島大学の国絵図、正倉院の国宝などの高精細画像作成の実績が知られていたので、われわれも同様の方式で、奈良絵本『住吉物語』（室町時代）、日本図（享保十七年）、大智度論（天平六年写）などの本学の宝物の画像作成を行うことした。平成十年十二月のことで、この少し前に、FlashPixや国内ではPFU社のGigaview（製品として販売されたのは翌年の夏）などの大容量画像を閲覧するソフトウェアの開発が進行し、十分に実用段階に達していた。

なぜフルカラーで高精細を目指したか。まず最初に考えたことは、原資料が人手に触れる回数を減らしたいという点であった。そのためには、可能な限り原資料を再現できるものでなければならない。文字、色、紙質などを再現するにはモノクロでは限界がある。また、地図上の地名表記などは、一米平方の大きさの地図で二ミリ程度というものがある。これを読める程度に再現するには百二、三十メガハイト程度の大きなファイル容量が必要になってくる。画像作成の選択肢として有力であったフォトCD（約八十メガバイト）も、われわれの目的のためには限界を有していると感じられた。

スキャナーについても、フィルム用ではなく印刷製版用のスキャナーを使用してもらうことになった。印刷製版用の方が明らかに文字のキレがあり、容量が小さくとも精度が出ることが判明したためである。

作成画像のベースは、当面、Tiff形式を採用することにしている。コピーに対して劣化がないこと、将来の展開に対して対応が可能であることが理由である。百年耐用が謳い文句のCD―R（六百五十メガバイト）にTiff形式で書き込めば、長期間の保存が可能だし、提供形式などの変更でデータの再作成が生じたにしても、このCD―Rに戻るだけでいい。

さて、高精細画像作成でもっとも重要なポイントは何か。われわれは、アナログの良い写真を撮影することだと考えている。対象資料の大きさや再現したい精度に合わせて、使用するフィルムは、八×十インチ、四×五インチ、三十五ミリ・カラーマイクロ（一昨年、文字対応の高品質な製品が開発された）などの違いはあるにしろ、写真を写すのではなく「データを撮る」ことに長じた写真家に撮影を依頼することが望ましい。良い写真があれば、その後の電子化のプロセスは、時代と技術の進展に伴い、いくらでもやり直しがきくのである。

先に、貴重書の原資料を保存するために、高精細画像などの電子化を行ったと述べた。原資料の代替物としては、マイクロ形態よりも扱い易い。特に研究者にとっては、研究室や自宅に居ながらにして利用できるのであるから比較するまでもない。しかし、電子化されたデータはどの程度保存可能なのだろうか。当然ながらまだ確認されていないが、三十年程度のスパンで媒体変換などを考慮せざるを得ないのではないだろうか。しかし、その場合でも、もう一度原資料の撮影に戻ることは避けたい。戻るのは、写真までにしたいのである。原資料と電子化された情報の中間項（長期間の保存に耐えるもの）にこだわりたいのである。

四　おわりに

高精細画像を提供する意義について、少し検討を加えて見る。（一）門外不出の資料の公開が可能である、（二）遠隔地にあっても原資料の校合ができる、（三）拡大、縮小が可能なため原資料の閲覧では判読不能な部分も解読できる可能性がある、（四）画像処理ソフトとの併用により、新しい角度から資料分析が出来る、（四）貴重資料保存問題への貢献、など思いつくだけでも幾つか列挙できそうである。しかし、本当の意義は、それぞれの資料の専門家たちが利用し、それらの研究に資することができるかどうかだとわれわれは考えている。答えはじきに出るはずである。ま

だ試行的色彩の強い高精細画像提供サービスであるが、是非とも、研究者・利用者の強い支持を受けた本格的なサービスへと成長させたいと願っている。

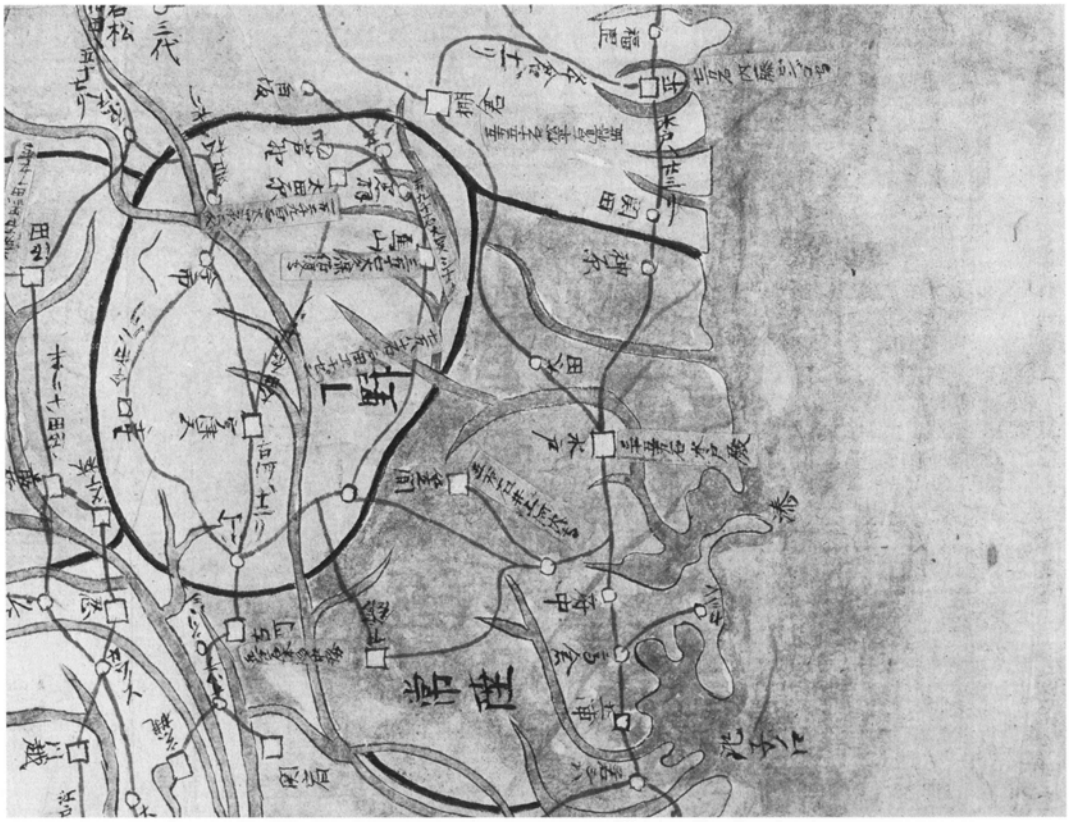
今回の特別展示は、筑波大学附属図書館が前身校以来収蔵してきた選り抜きの資料である。是非ご鑑賞いただきたい。あわせて、原資料とは異なる特長を有する高精細画像もご覧いただきたいと考えている。これを契機に、高精細画像の可能性について大方の関心を得ることができれば幸甚である。

なお本稿に記した画像作成のノウハウや経験等については、共同で作業をした先輩同僚諸兄にその多くを負っているが、誤りがあるとすればすべて筆者の責任であることを注記しておきたい。

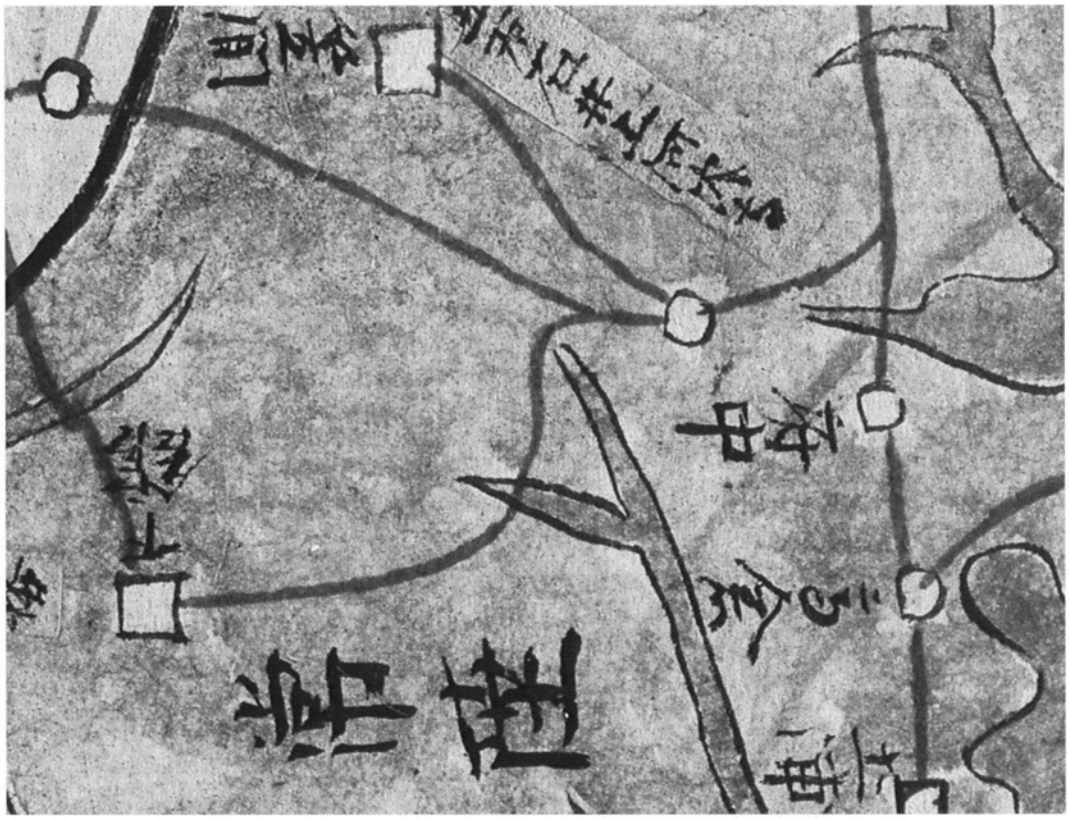
（こにし　かすのふ　図書館部情報システム課長）

○　現在提供中の高精細画像リスト（http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/pub/tree/kochosho.html で閲覧可能です）

資料名	解像度	ピクセル数	ファイル容量
住吉物語絵巻（室町時代初期～中期）　上巻	一、一〇〇dpi	二八、一七四×　一、三二一	約八五〇Mb
住吉物語絵巻（室町時代初期～中期）　下巻	一、一〇〇dpi	二六、二四四×　一、四〇九	約七〇〇Mb
大智度論（天平六年写）　一軸	一、一〇〇dpi	二八、三八八×　七二六	約七〇〇Mb
山東黄河全図（光緒二十九年）　一折	一、一〇〇dpi	一四、〇〇〇×　一、二六六	約二四〇Mb
日本図（享保十七年）　一帖	一、一〇〇dpi	六、九〇四×　五、七四六	約一、〇〇〇Mb
難波津之図（寛政十一年）　一帖	一、一〇〇dpi	六、八九一×　五、〇九七	約三三〇Mb
教育錦絵（明治初期）　百五十一枚	六〇〇dpi	四、九三八×　六、九九九	各約一〇〇Mb
歴聖大儒像（程白子）（寛永九年）　一軸	一、六〇〇dpi	四、七八九×一四、二一二	約二〇〇Mb
歴聖大儒像（程叔子）（寛永九年）　一軸	一、六〇〇dpi	四、七九八×一四、二一三	約二〇〇Mb
歴聖大儒像（周子）（寛永九年）　一軸	一、六〇〇dpi	四、七八六×一四、二二一	約二〇〇Mb
歴聖大儒像（邵子）（寛永九年）　一軸	一、六〇〇dpi	四、七八三×一四、二〇八	約二〇〇Mb
歴聖大儒像（張子）（寛永九年）　一軸	一、六〇〇dpi	四、七八五×一四、一九一	約二〇〇Mb
歴聖大儒像（朱子、掛軸）（寛永九年）　一軸	一、六〇〇dpi	九、四七一×二九、三五三	約八〇〇Mb
浦風（江戸初期）　三巻一冊	一、二〇〇dpi	五、〇〇〇×　三、六〇〇	各約六〇Mb
鯰絵（江戸末期）　二十三枚	六〇〇dpi	七、〇〇〇×　五、〇〇〇	各約一〇〇Mb
北野社領丹波国船井庄関係文書　一軸	六〇〇dpi	七、〇〇〇×　五、〇〇〇	各約一〇〇Mb
Joan Amos Comenii Orbis pictus（コメニウスの世界図絵）一冊	六〇〇dpi	六、〇〇〇×　四、八〇〇	各約九〇Mb



「日本図」(享保十七年)の一部。ほぼ原寸大のもの。地名等は3〜4mm程度である。



上図の常陸国の部分を拡大したもの。細かな地名が十分に判読できる。

筑波大学附属図書館所蔵芸術関係和書貴重図書について

篠塚　富士男

筑波大学附属図書館には二百万冊を越える蔵書があるが、これらの蔵書の中には明治五（一八七二）年に開設された師範学校以来の前身校の旧蔵書も含まれており、こうした長い歴史を反映して和洋あわせて三千件を越える貴重図書・準貴重図書を所蔵している。これらの中には、広い意味で芸術の分野に関わる資料も多数含まれているが、ここでは、それらのうちから絵画および書関係の和書をリストアップした。これらの資料を含む和漢の貴重図書については、『筑波大学和漢貴重図書目録』（平成八年、筑波大学附属図書館発行、筑波大学電子図書館のホームページ http://www.tulips.tsukuba.ac.jp からも全文情報として閲覧可能）に詳細な目録がある。

ここでリストアップした基準等は以下のとおりである。

（一）　原則として貴重図書・準貴重図書に指定されているものから選定した。

（和書の貴重図書の指定基準は、慶長以前に刊写されたもの、及び元和以後に刊写されたもののうち資料的又は芸術的価値が高いと認められるものである）

（二）リストの内容は絵画関係資料と書関係資料に大別した。

一　絵画関係資料については

①絵本、絵巻類は年代を問わず選定した。

②名所記、黄表紙等の刊本については、挿絵を著名な絵師・画家が描いているもののみを選定した。

③大型で彩色挿絵のあるものから、旗指物等の軍事関係のものを選定した。

二　書関係資料については

①鎌倉以前に書かれたものは全点選定した。

②室町以降のものは、名家自筆（または自筆書き入れ・校訂）のものを選定した。また、自筆本には伝〇〇として伝来してきたもの（誤りであると判断されるものを除く）も含んでいる。

③「名家」としては、能書家として知られる人の他に、文学、思想関係で一般に知られている人を想定した。

今回のリストアップにあたっては、この基準にしたがって従来の分類（配架記号）にとらわれずに、「芸術」関係資料という発想で選定し、絵画、書のそれぞれに制作・出版年順にリストを作成した。このような観点からの整理は従来は行われてこなかったが、基本的には芸術作品そのものを収蔵の対象とはしていない大学図書館にあっても、蔵書の構築の過程でさまざまな芸術関係資料を収蔵してきたことが確認できる。こうしたものについては、今後さらに多方面からの検討が必要になるものがあることが予測される。なお、今回は古文書類や貴重図書等に指定されていない錦絵類、古記録等はリストアップの対象外としたが、これらについても、総合的に「芸術」関係資料として考えることができ、今後これらも含めての蔵書全体の再検討を行う必要があろう。

（しのつか　ふしお　図書館部情報サービス課）

（凡例）

配架記号のうち、イロハで始まるものは「東京教育大学附属図書館和漢図書分類表」（旧分類）によるものであり、数字で始まるものは「日本十進分類法（NDC）」（新分類）によるものである。

書名等のうち〔　〕でくくられているものは、資料に記載がないため、目録作成時に書名等を補記したものである。

書名等のうち（　）でくくられているものは、補足的な情報である。

一　絵画関係資料

番号	書名	配架記号	制作・出版年	備考
一	〔住吉物語絵巻〕二軸	ル一二〇—三六四	室町初～中期	奈良絵巻
二	伊勢物語聞書（肖聞抄）三巻　三冊	ル一二〇—一五七	慶長一四（一六〇九）	嵯峨本
三	〔文正草紙〕二軸（絵巻）	ル一二〇—一三六	寛永八（一六三一）	御伽草子、奈良絵本
四	歴聖大儒像（聖賢像軸）六幅	七二一・四—Ka五八	寛永九（一六三二）	狩野山雪画、浅草文庫旧蔵、湯島聖堂に伝来したもの
五	〔しゃかの本地〕一冊	ハ三六〇—三六一	江戸初期写	奈良絵大形本、御伽草子
六	一尼公さうし（つれなしの尼君）（仮題）一冊	ル一二〇—三五二	江戸初期写	奈良絵本、他に伝本はない
七	浦風　三巻　一帖	ル一二〇—三五三	江戸初期写	奈良絵本、他に伝本はない
八	住吉物語　五分冊（第一分冊欠）四冊	ル一二〇—三八六	江戸初期写	奈良絵本
九	東叡山名所　一巻　一冊	ネ三〇六—一四七	天和二（一六八二）	〔菱川師宣〕画、刊本
一〇	大和名所鑑　三巻　一冊	ネ三〇六—九九	元禄九（一六九六）	菱川師宣画、刊本
一一	解体新書　序図一巻（本文四巻欠）一冊	サ二〇〇—六	安永三（一七七四）	小田野直武画
一二	百文二朱　寓骨牌　三巻　三冊	ル一五六—一三	天明七（一七八七）	山東京伝著、北尾政演（＝京伝）画、刊本
一三	合三国小女郎狐（草稿）〔二巻　六冊〕合一冊	ル一五六—五三	文化一〇（一八一三）	柳亭種彦著、柳亭種彦筆画、稿本
一四	合三国小女郎狐〔二巻　六冊〕合一冊	ル一五六—五三	文政四（一八二一）	柳亭種彦著、柳川重信画、刊本
一五	〔蒙古襲来絵巻〕二軸	カ二一〇—三三四	江戸後期写	絵巻
一六	御幕下軍林捷径　一冊	キ三〇〇—二五五	江戸後期写	旗指物を図示したもの、全図彩色
一七	南総里見八犬伝　全九輯　九八巻　一〇六冊	ル一五六—一五	天保三（一八三二）以降	曲亭馬琴著、柳川重信等画、後刷本、紙製原帙
一八	古今要覧稿　禽獣部　五冊	テ七〇〇—六	文政八（一八二五）～天保五（一八三四）	田安家旧蔵、彩色挿絵あり
一九	武器図　一冊	キ三〇〇—五八	嘉永一（一八四八）	武器二百種余を図にしたもの、全丁彩色刷
二〇	鯰絵（コレクション）二三枚	七二六・一—N四七	江戸末期摺	一枚摺
二一	〔北海道開拓民并アイヌ風俗絵巻〕一軸	三八二・一一—H八二	明治一六（一八八三）	絵巻

二　書関係資料

番号	書名	配架記号	制作・出版年	備考
一	大智度論　巻第七〇　一軸	ハ三三〇—一一六	天平六（七三四）	物部連大山筆、石山寺一切経黒印あり、白訓点あり（天安二（八五八）記入）

二	瑜伽師地論　巻七三　一巻　一帖	ハ三三〇—一六三	天平一六（七四四）	石山寺一切経黒印あり	
三	金剛頂経瑜伽修習毘盧遮那三摩地法　一巻　一軸	ハ三三〇—一六六	延長八（九三〇）以前	石山寺旧蔵	
四	金剛頂大教王経　三巻（存巻二、三）二帖	ハ三三〇—一〇七	保延二（一一三六）以前	巻一は東大国語学研究室蔵	
五	止観輔行伝弘決　零本（存　巻第七）一帖	一八八・四—Ta八八	康治二（一一四三）		
六	文字反　一葉	チ四〇〇—一三四	鎌倉初期写	高山寺旧蔵、五十音図	
七	悉曇要決　四巻　四帖	チ四二五—三〇	天福二（一二三四）		
八	十八契印　一枚（一一紙継）	一八八・五—Ku二七	鎌倉中期写		
九	護国寺旧記　一軸（存下巻）	ヨ二一六—二三七	鎌倉後期写		
一〇	新撰菟玖波集　二〇巻　四冊	ル二二〇—三四	明応八（一四九九）	三条西実隆・姉小路基綱等筆、古筆了珉・畠山牛菴極札あり	
一一	新古今和歌集　二〇巻　二帖	ル二一〇—七七	室町中期写	山崎宗鑑筆、古筆了祐極札あり	
一二	長秋詠草　三巻　一帖	ル二一六—一六六	室町中期写	伝姉小路基綱筆、古筆了雪極札あり	
一三	〔古文〕尚書〔抄〕零本（存巻八）一冊	ロ八一五—一	永正一一（一五一四）	清原宣賢著、清原宣賢自筆、巻七・巻一〇は京都大学附属図書館蔵	
一四	草短歌　一巻　一冊	ル二一六—一〇三	江戸初期以前写	柳亭種彦自筆校合	
一五	古今和歌集　一二巻　二帖	ル二一〇—一一〇	江戸初期以前写	伝世尊寺行尹筆、烏丸光広・古筆了仲極書あり	
一六	後撰和歌集　一〇巻（存巻巻一一—二〇）一帖	ル二一〇—一三二	江戸初期以前写	伝二条為定筆、烏丸光広識語あり	
一七	新古今和歌集　二〇巻　二帖	ル二一〇—五九	江戸初期以前写	伝飛鳥井雅教筆、古筆鑑定畠山牛菴極札あり	
一八	八雲抄　六巻　六帖	ル二〇五—一三九	江戸初期以前写	伝徳大寺公維等筆、古筆勘兵衛極札あり	
一九	筆鋒隷鑑集　二巻　二冊	カ二一〇—二五	寛永一九（一六四二）	筆法と隷書の字体を記す、伝本は極めて少ない	
二〇	清少納言家集　一巻　一軸	ル二一四—二五	江戸初期写	伝釈契沖筆	
二一	難後拾遺　一巻　一冊	九一一・一三—Mi三八	元禄一〇（一六九七）	伝釈契沖筆	
二二	鴨明抄　一巻　一冊	ル二〇五—一三八	江戸中期以前写	伝大村由己等筆、古筆鑑定朝蔵茂入極札あり	
二三	劉氏無尽蔵（抄書）一冊	イ四〇〇—一三九	明和七（一七七〇）	大田南畝筆	
二四	林春斎自叙譜略　一冊	タ五〇〇—九〇	江戸中期写	大田南畝筆	
二五	鑽故紙　四巻　四冊	イ三〇〇—四五	文化三（一八〇六）	大田南畝等筆	
二六	伊勢物語箋　二巻　二冊	ル一二〇—三六八	文政一（一八一八）	橘守部著、橘守部筆、草稿本	
二七	白石叢書　三〇巻　三〇冊	イ三二〇—四〇	江戸後期写	曲亭馬琴自筆書入・校訂本	

出品目録

〔目録番号一―三並びに参考出品一は、書名（作品名）を図書館の表記に従った。〕

	書名（作品名）	制作年	筆者	備考
一	大智度論　巻第七〇　一軸	天平六（七三四）年写	物部連大山筆	石山寺一切経黒印あり
二	瑜伽師地論　巻七三　一巻　一帖	天平一六（七四四）年写		石山寺一切経黒印あり
三	金剛頂経瑜伽修習毘盧遮那三摩地法　一巻　一軸	延長八（九三〇）年以前写		石山寺旧蔵
四	歴聖大儒像　六幅＊	寛永九（一六三二）年画	狩野山雪筆	湯島聖堂に伝来したもの
五	「野外奏楽、猿曳図」屏風　六曲一双	江戸初期（一六五一―六〇）	狩野探幽筆	新出屏風
六	「李白観瀑、剡渓訪戴図」屏風　六曲一双	江戸初期（一六四〇―五〇頃）	狩野尚信筆	新出屏風
七	「架鷹図」押絵貼屏風　六曲一双	江戸前期	田村直翁筆	新出屏風

＊歴聖大儒像　肖像内訳

四―一　周子（周濂渓）　四―二　張子（張横渠）　四―三　程伯子（程明道）

四―四　程叔子（程伊川）　四―五　邵子（邵康切）　四―六　朱子（朱熹）

（参考出品）

一　賢聖障子図　三枚（一四枚のうち）

湯島聖堂に掲げられていた先賢先儒木製扁額の江戸時代模写本。儒者に交じり杜子春、董仲舒、韓愈、公孫龍等が描かれている。

二　住吉物語絵巻（複製）

館蔵の室町時代中期以前に作成された奈良絵巻を複製したもの。

特別展「筑波大学附属図書館所蔵　日本美術の名品―石山寺一切經、狩野探幽・尚信の新出屏風絵と歴聖大儒像―」

当初企画▌美術史学会筑波大学教員会議（代表中山典夫＋角井博＋三神弘彦＋五十殿利治＋斎藤泰嘉＋守屋正彦＋八木春生）
附属図書館企画会議（板橋秀一＋二上一朗＋金井晃＋堀内眞也＋小西和信＋三浦正克＋篠塚富士男）
新出屏風絵広報会議▌北原保雄＋桑原敏明＋冨江信治＋板橋秀一＋今井雅晴＋守屋正彦＋小口浩一＋飯田和郎＋三國治＋梶原憲次＋久保鉄男＋富山征夫
展覧会ディスプレイ▌守屋正彦＋日本美術史研究室＋附属図書館ワーキンググループ（小西和信＋藤原英樹＋山崎好子＋吉田英夫＋福島裕子＋
大和田康代＋篠塚富士男＋北村照夫＋高島恵美子＋三浦正克＋落合厚子＋徳永智子＋金藤伴成＋真中孝行）
図録編集▌角井博＋守屋正彦＋小西和信＋三浦正克＋篠塚富士男
図録執筆▌北原保雄＋白木俊之＋板橋秀一＋角井博＋守屋正彦＋中根恭子＋横島奈穂子＋渡邉晃＋伊藤たまき＋小西和信＋篠塚富士男
図録写真▌斎藤さだむ（＋女屋良生）＋三浦正克＋篠塚富士男

学術協力▌河野元昭教授（東京大学文学部、同大学院人文社会系研究科）のご協力を賜りました。篤くお礼申し上げます。

筑波大学附属図書館所蔵　日本美術の名品
―石山寺一切経、狩野探幽・尚信の新出屏風絵と歴聖大儒像―

平成十二年五月二十二日　発　　行
平成十三年二月二十八日　第二刷発　行

発　行　筑波大学附属図書館（代表　板橋秀一）©二〇〇〇
〒305-6577　茨城県つくば市天王台一-一-一
☎(0298)53-2348

制　作　アート印刷株式会社
〒720-0077　広島県福山市南本庄一-一〇-三八
☎(0849)24-5588(代)